秋田県文化財調査報告書第467集

秋田県重要遺跡調査報告書Ⅱ

― 檜山安東氏城館跡（大館跡）調査 ―

２０１１・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

秋田県重要遺跡調査報告書Ⅱ

― 檜山安東氏城館跡（大館跡）調査 ―

２０１１・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望したり彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

県教育委員会では、各種公共事業に先立って受託する「緊急発掘調査」と、国庫補助事業としての「学術調査」を実施しております。いずれも埋蔵文化財を保存・活用することでの方向性は同じですが、後者は払田柵跡の継続的な調査を通して、学術的・技術的蓄積と市町村教育委員会担当職員に対する調査技術継承・向上を目的とした重要な役割も含まれます。

私たちは県内に所在する重要遺跡の保存・活用を図るため、平成21年度から３年間の計画で「秋田県重要遺跡調査事業」を実施しております。２年目にあたる本年度は、史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡・大館跡・茶臼館跡）のうち、大館跡を選定しました。

大館跡は、平安時代の集落跡と中世城館との複合遺跡として史跡指定されておりますが、台地を区切る土塁・空堀の詳細な時期は明らかではありませんでした。調査の結果、一定量の擦文土器が出土し、平安時代後期まで集落が存続していたことが確認されました。また擦文土器の出土層位から、台地中央を横断する土塁・空堀が、平安時代後期に構築された可能性を提起することができました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました文化庁記念物課、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に感謝申し上げますとともに、能代市教育委員会の御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成23年３月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　言

1　本報告書は、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が担当し、秋田県重要遺跡調査事業として実施した、檜山安東氏城館跡（大館跡）調査の成果を収めたものである。また事業の実施にあたっては、緊急雇用創出臨時対策基金を活用した。

2　本調査にあたり、能代市扇田地区自治会、能代市教育委員会からは多大なる協力を賜った。また調査成果の比較検討のため、能代市教育委員会所蔵の昭和 46 ～ 51 年度（第１～６次）調査に係る成果等についても一部を掲載した。遺跡周辺の俯瞰写真については、能代市提供の空中写真を掲載した。

3　発掘調査並びに本書作成にあたり、史跡払田柵跡調査指導委員である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長　新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授　岡田茂弘氏、富山大学教授　黒崎直氏、秋田大学学長特別補佐　熊田亮介氏から御指導をいただいた。

4　本報告書を作成するにあたり、次の方々より有益な教示をいただいた。記して謝意を表する。
近江俊秀、林正憲（文化庁記念物課埋蔵文化財部門）　坂井秀弥（奈良大学）　山崎和夫、畠山健人（能代市教育委員会）　播摩芳紀（能代市立図書館）　宇部則保（八戸市教育委員会）

以上　順不同・敬称略

5　第２章第３節は、分析委託業者であるパリノ・サーヴェイ株式会社から成果品として納められた報告書を掲載した。

6　調査に係る全ての資料は、秋田県教育委員会が保管している。

7　本書の作成･編集は、当事務所長の指導のもと、五十嵐一治が行った。また調査の実施にあたり、秋田県埋蔵文化財センター高橋学、村上義直の協力を得た。

凡　例

1　遺構等の実測図は、世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標北を示し、磁北は西偏８°30′である。

2　土層断面図等の土色の表記は､小山正忠･竹原秀雄『新版標準土色帖』(19 版 1997 年）に拠ったが、本書の記述にあたり、土質（性）を重視して記載した。表記にあたり基本層序は、ローマ数字（Ⅰ、Ⅱ･･･)、遺構堆積土はアラビア数字（１、２･･･）を使用した。また盛土・整地層をＭ、撹乱層をＫとして略号表記した。

3　遺構・遺物には以下の略記号を使用した。

ＳＤ　空堀・溝状遺構　　ＳＦ　土塁　　ＳＫ　土坑　　ＳＫＰ　柱穴様ピット
ＲＰ　土器　　ＲＱ　石器・石製品　　ＲＷ　炭化材　　Ｓ　礫

秋田県重要遺跡調査報告書Ⅱ

目　次

序

例言･凡例

第１章　重要遺跡調査事業の概要……1

第２章　檜山安東氏城館跡(大館跡)調査

　第１節　遺跡の概要と調査の目的……2

　第２節　検出遺構と遺物……4

　第３節　自然科学的分析……16

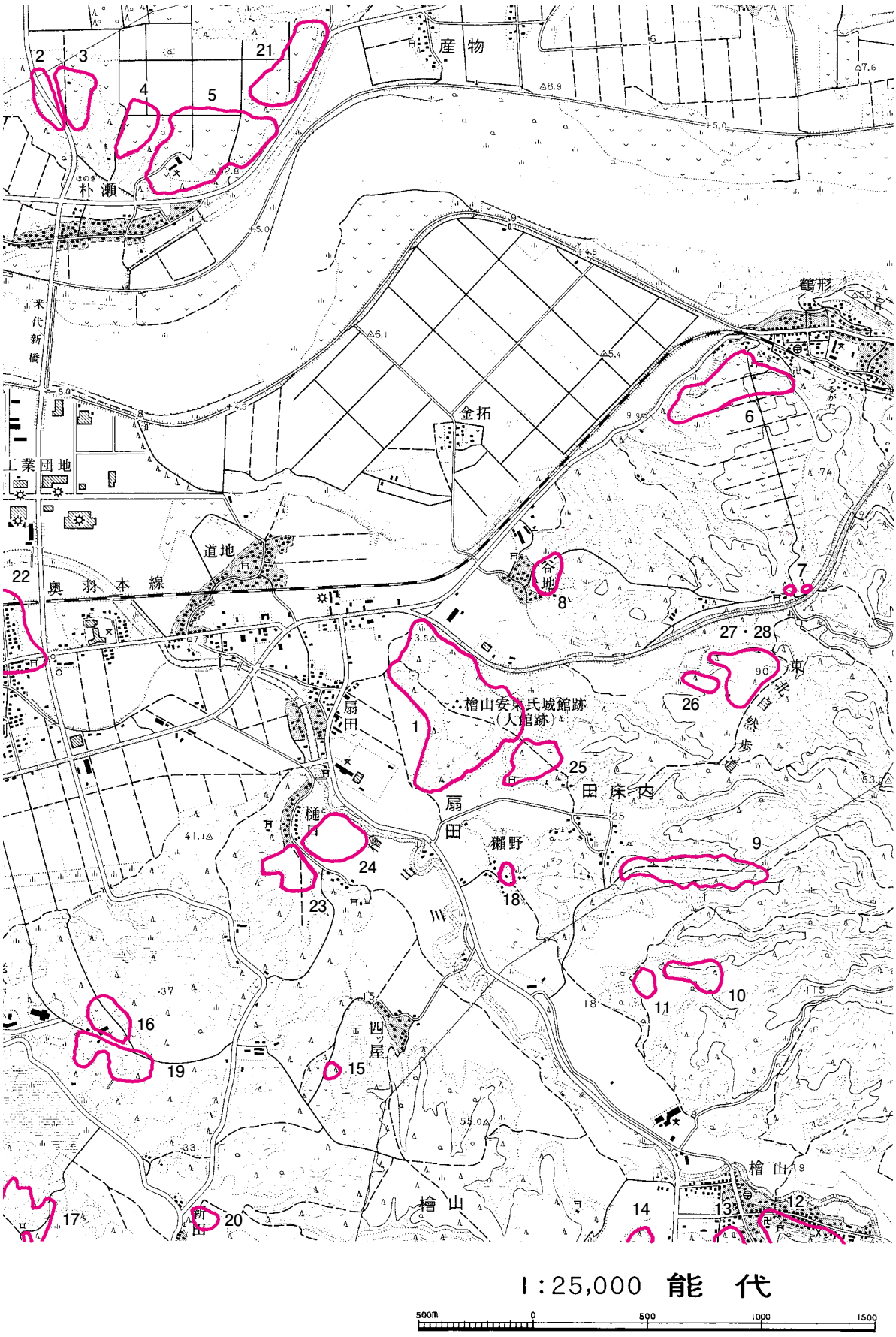
　第４節　小結……21

第３章　総括……32

附図１～３

第１表　大館跡周辺の主な古代遺跡一覧

地図番号	遺跡№	遺 跡 名	所　在　地	種　別	遺 構・遺 物
1	202-2-103	大館	能代市田床内字大館	集落跡、館跡	竪穴建物跡・土塁・空堀・柵列・掘立建物跡・石組遺構、須恵器・土師器・擦文土器・鉄製品
2	202-2-53	八森坂Ⅰ	能代市朴瀬字八森坂	遺物包含地	土坑、縄文土器・須恵器・土師器・石器
3	202-2-54	八森坂Ⅱ	能代市朴瀬字八森坂	遺物包含地	土坑、須恵器・縄文土器・土師器・石器
4	202-2-55	中台	能代市朴瀬字社地祭中台	集落跡	竪穴建物跡・製鉄炉、縄文土器・須恵器・土師器
5	202-2-56	二林台	能代市朴瀬字二林台、字林台	遺物包含地	縄文土器・土師器
6	202-2-99	上の山	能代市字上の山台	遺物包含地	縄文土器
7	202-2-100	鴨巣一里塚	能代市字上の山、字谷地上	一里塚	
8	202-2-102	谷地館	能代市字田中谷地	館跡	段築
9	202-2-104	二夕又	能代市田床内字二夕又	集落跡	竪穴遺構・土坑・溝跡、縄文土器・須恵器・土師器・刀子
10	202-2-105	三岳館	能代市桧山字上館	館跡	段築・堀切
11	202-2-106	三岳	能代市桧山字上館	遺物包含地	縄文土器・石器
12	202-2-109	檜山城跡	能代市桧山字古城	館跡	土塁・空堀・段築、肥前陶器・青磁・古瀬戸陶器
13	202-2-110	多賀谷居館	能代市桧山字霧山下	館跡	土塁･段築･井戸跡･土坑、須恵器･陶磁器･土製品･木製品･砥石･鉄釘・手鏡・銭貨・須恵器系中世陶器
14	202-2-111	茶臼館跡	能代市桧山字茶臼館	館跡	段築・堀切、須恵器・青磁・中世陶磁器
15	202-2-113	四ツ屋台	能代市扇田字四ツ屋台	遺物包含地	縄文土器・須恵器・土師器
16	202-2-114	苗代沢	能代市鰄渕字苗代沢	遺物包含地	縄文土器・石器・須恵器・土師器・中世陶器
17	202-2-131	小友Ⅲ	能代市中沢字小友	集落跡	竪穴建物跡･フラスコ状土坑、縄文土器･須恵器･土師器･緑釉陶器･須恵器系中世陶器・青磁・紡錘車
18	202-2-169	獺野	能代市扇田字獺野	遺物包含地	中世陶器
19	202-2-171	新田沢	能代市桧山字新田沢	遺物包含地	縄文土器・石器
20	202-2-172	中瀬戸沢	能代市桧山字中瀬戸沢	遺物包含地	須恵器・土師器
21	202-2-187	林台	能代市朴瀬字林台	遺物包含地	縄文土器・石器
22	202-2-194	鰄渕	能代市鰄渕字鰄渕	遺物包含地	縄文土器・須恵器系中世陶器・鉄滓
23	202-2-199	樋口	能代市字樋口	祭祀場	捨て場･井戸跡･溝跡･土坑･杭列･柱穴様ピット、須恵器･土師器･木製品・石製品・土製品
24	202-2-200	岩ノ目	能代市字岩ノ目	遺物包含地	縄文土器・須恵器・土師器
25	202-2-201	縄手下	能代市田床内字縄手下	集落跡	土坑・陥し穴状土坑・フラスコ状土坑・掘立柱建物跡・溝跡・炭窯・柱穴様ピット、旧石器・縄文土器・須恵器・土師器
26	202-2-202	鴨巣館	能代市田床内字鴨巣	城館跡	空堀・土坑、土師器
27	202-2-203	鴨巣Ⅰ	能代市田床内字鴨巣	集落跡	竪穴建物跡・炭焼遺構・土坑・焼土遺構・溝跡、須恵器・土師器
28	202-2-204	鴨巣Ⅱ	能代市田床内字鴨巣		



第１図　大館跡周辺の主な古代遺跡

第１章　重要遺跡調査事業の概要

秋田県教育委員会では、昭和 49 年度以来継続して史跡払田柵跡の発掘調査を実施してきており、その成果は県教育委員会による学術調査の蓄積として、また日本考古学及び古代史研究に資する成果として、行政機関及び学会から大きく評価されている。一方、高度経済成長期以降、地方にも波及した大規模開発事業の増大に伴い、多くの遺跡が事業地に係り亡失の憂き目にさらされたこともまた事実である。

県教育委員会では、開発計画地内に埋蔵文化財包蔵地が所在する場合、開発事業者に事前協議を求め､計画の変更等により遺跡の保存を最大限図るように努めている。しかし計画の変更は困難を伴い、開発に先立つ発掘調査を行い記録保存の措置を講じざるを得ない場合が多く、また発掘調査中・工事中に重要な遺構等が発見されても、それらを現地に現状保存することは極めて困難な状況となっている。

本事業は、払田柵跡学術調査による学術的・技術的蓄積を基礎として、市町村教育委員会と連繋しながら県内に所在する重要な遺跡等の範囲及び性格を確認する目的の試掘・確認調査を実施し、保護管理施策を万全とすることを目的とする。また埋蔵文化財の保存・活用や史跡・有形文化財等への指定を計画的に進めるための基礎資料にするとともに、開発計画との円滑な調整を図るための基礎情報としても活用を図ることを目的とした。

初年度の平成 21 年度は、昭和６年に県内最初の国史跡指定を受け、払田柵跡調査事務所による継続的な調査成果をもとに調査計画･調査地選定が明確化されている払田柵跡を対象に調査を実施した。

２年目にあたる平成 22 年度は、史跡檜山安東氏城館跡(檜山城跡・大館跡・茶臼館跡)のうち大館跡を対象とし、過年度の市教育委員会調査資料との比較検討も併せて実施した。

図版１　大館跡（左 2000 年、右 2008 年）

第２章　檜山安東氏城館跡（大館跡）調査

第１節　遺跡の概要と調査の目的

１　遺跡の概要

大館跡は史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡・大館跡・茶臼館跡）の一部をなし、昭和 46 ～51 年度にかけて学校移転計画に先立つ発掘調査が行われ、調査の結果、平安時代の大規模な集落跡と土塁・空堀等が良好な状態で検出された。平安時代の集落は出土遺物から概ね９世紀後半～10 世紀代と考えられるが、日本三代実録にある「野代営」擬定地の一つとしても考えられている。

能代市教育委員会による調査の結果、台地上に広がる大集落と柵列・土塁・空堀等が検出された。土塁・空堀は台地中央を横断するもの及び南側を区切る大型のもの、台地縁辺を区切るもの等が確認されている。空堀は平安時代の竪穴建物跡を一部削平して構築されていたこと、またその削土を利用して土塁が構築されていたこと、そしてその規模の大きさから、檜山城の支城的役割を果たした中世安東氏に関連する城館群の一部として昭和 55 年３月に国史跡指定を受けた。

遺跡は米代川及び支流の檜山川に挟まれた台地上に立地し、近年は高速道路（琴丘能代道路）建設に伴う発掘調査により、近隣で複数の大規模な平安時代集落が調査されている。第１図に周辺遺跡の詳細と立地状況を示す。

２　調査の目的

今回の調査対象地は平安時代集落が広がる台地上の平坦部のうち、台地中央を区画する土塁・空堀周辺と南東部の張り出しを区切る土塁・空堀周辺、及び柵列が巡る台地北側縁辺である。

調査目的としては、柵列・土塁・空堀等の年代決定に係る情報として、広域火山灰（十和田ａ及び白頭山火山灰）の検出に努めるとともに、これらと平安時代集落遺構との詳細な重複関係を把握することにより柵列・土塁・空堀の構築時期を決定することを目的とした。また近年県内で調査が進められた同様の大型囲郭施設を有する 10 世紀後半～11 世紀代の遺跡（横手市大鳥井山遺跡、秋田市虚空蔵大台滝遺跡など）の類似遺構等との比較検討も併せて実施することとした。

今回の調査では、大館跡が「野代営」であるか否かを解明することは直接の目的とはせず、柵列・土塁・空堀等の施設が帰属する時期を絞り、複合遺跡としての内容解明に至る今後の問題点を整理することを第一とした。また長らく発掘調査が実施されなかった当該史跡について、能代市教育委員会との協力体制のもと、様々な形で調査成果を地元へ還元することにも努めることとした。

調査は遺構分布確認のため、それぞれの対象区の範囲内に幅２ｍ程度のトレンチを設定して調査し、掘り下げにあたっては堆積状況の詳細及び微地形の把握に主眼を置きながら遺構及び整地面を確認し、必要に応じて一部を拡張した。

記録にあたっては、台地上の三角点と国土調査杭から国家座標及び水準を導き、トレンチの形状と位置を光波測量し、各トレンチ内においては基準点を任意に設定して手取り計測を実施した。また基準点は光波測量し、室内で手取り計測図面と合成した。

３　調査の経過

８月23日、能代市教育委員会の協力を得て器財を現地に運搬し、テントを設営した。調査用ヤードおよび台地中央部を横断する土塁・空堀周辺の刈り払いを開始。27日、土塁・空堀南側に並行して第１・２トレンチを設定し精査開始。付近の三角点より水準測量を実施。30日、Ⅲ層(平安時代包含層)まで掘り下げ。遺物出土は比較的多い。31日、Ⅱ層下部～Ⅲ層中にかけて焼礫塊が多数出土することを確認、鍛冶関連の遺物か。土塁(ＳＦ６)に直交する第３トレンチを設定し、精査開始。

９月７日、第２トレンチをⅤ層(地山)まで精査。遺構掘り込み面はⅢ層中となるものの、複数の文化面としてはとらえられず。第１トレンチで幅８ｍもの大型プランを確認。９日、第３トレンチの断面より、土塁の構築土がⅢ層の直上に盛土されることを確認。10日、第１トレンチの大型プランが、第３トレンチ拡張部(３Ｂトレンチ)まで広がる竪穴建物跡(ＳＫＩ５)のプランである可能性。南西隅を検出するため第１Ｂトレンチを設定し精査開始。15日､竪穴の北東および南西隅が確認できたため、南東隅検出のため第１Ｃトレンチを設定して精査開始。調査計画では台地上に３か所の調査対象地を設定していたが、最初に着手した本地点に集中することとした。24日、竪穴の北西隅検出のため第３Ｃトレンチを設定し精査開始。竪穴建物跡とすれば、約10×８ｍの略長方形となる。断面観察によると一括埋め戻しで、初めに周囲を地山ブロック混じりの土を入れ、その後中央部を黒土で一気に埋め戻している。土塁上面は近世以降の開墾により削平されている。30日、空堀(ＳＤ７)の掘り下げ精査を開始。

10月１日、第１Ｃトレンチで南東隅を確認、残る北西隅が係る第３ＣトレンチのⅢ層精査中にフイゴ羽口が出土。６日、第３Ｃトレンチ精査により、大型の竪穴建物跡と重複して古い別の竪穴建物跡(ＳＫＩ54)の存在を確認。また第３トレンチのサブトレンチで検出した鍛冶炉がこの古い竪穴に伴うものと確認。７日、空堀の堀底付近に礫群を検出。逆台形の断面形である。８日、古い竪穴の鍛冶炉周辺を精査。凝灰岩質の礫を煉瓦状に加工した塼の様な形態の石製品破片が散乱している。炉の基部に使用したものか。14日、文化庁記念物課埋蔵文化財部門林調査官来跡。土塁構築時にⅢ層が削平を受けていないか確認すること及び竪穴建物の主柱穴を確認することについて指導を受ける。20日、第１Ｃトレンチでの炭化材出土状況から、新しい竪穴は壁溝を持たず、壁より１ｍ弱内側に検出した溝が板壁の痕跡である可能性が想定された。23日、現地見学会を開催し、新野直吉委員以下、77名が参加。地元扇田・田床内地区や檜山地区を始め、県外からも多く参加があった。28日、第１Ｃトレンチの炭化材下より新旧２時期の主柱穴を検出。板壁内側に沿って合計９本の主柱穴を有する構造を想定できる。以後埋め戻しに係る。

11月５日、埋め戻しを終了し、能代市教育委員会の協力によりテント等器財を撤収。調査の全工程を終了した。

第２節　検出遺構と遺物

１　基本層序

調査区の基本層序については、遺構確認面を含む平安時代包含層及びその上面へのＳＦ６土塁構築土の盛土が累重する、第３トレンチの西側断面を基準とした。詳細は次のとおり。

第Ⅰ層　10YR2/3 黒褐色シルト層 植物根多量含む 表土

第Ⅱ層　10YR4/4 褐色シルト層 地山小粒少量含む 炭小粒少量含む 耕作に伴う整地層か よく締まる

第Ⅱ'層　10YR3/4 暗褐色シルト層 炭中粒少量含む 焼土中粒少量含む Ⅲ層由来の旧表土か 相対的に低い部分に堆積するが、高い部分ではⅢ層上面に幾分腐植を挟み痕跡的となる

第Ⅲ層　10YR3/3 暗褐色シルト層 炭中粒多量含む 焼土中粒多量含む 平安時代包含層

第Ⅳ層　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト層 地山漸移層

第Ⅴ層　10YR5/6 黄褐色シルト層 地山

２　検出遺構と遺物

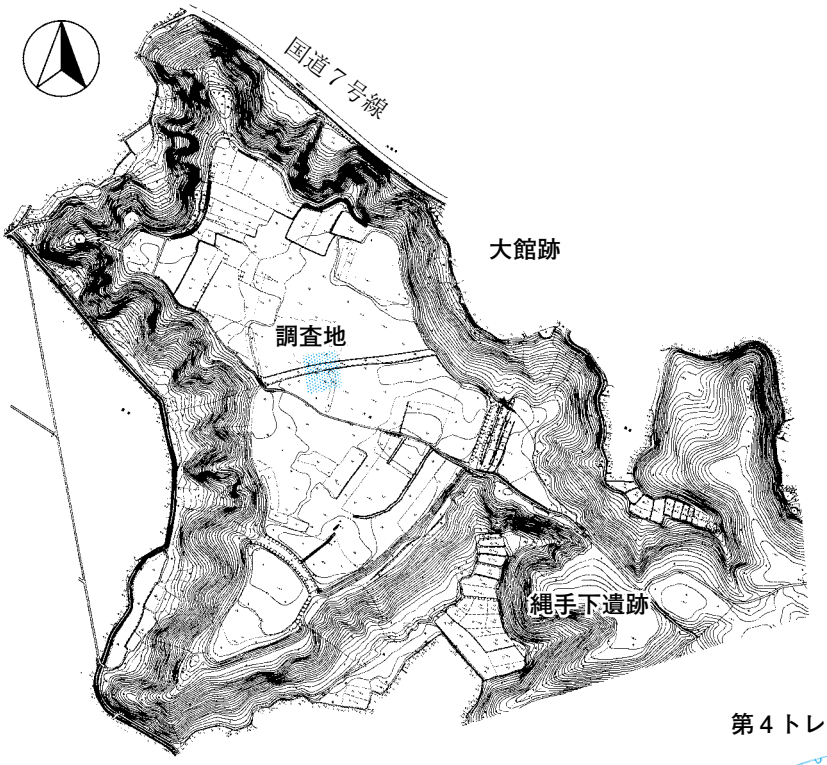
検出された遺構の総数は 59 基で、竪穴建物跡２棟・土塁１条・空堀１条・溝状遺構３条・土坑６基・柱穴様ピット 46 基となる。竪穴建物跡及び溝状遺構、土塁・空堀について本項で詳述する。また平面プランとしては確認できなかったが、第４トレンチ北・西壁、第３トレンチ北側のサブトレンチ東壁では地山漸移層（Ⅳ層）まで削られた部分があり、第４トレンチ北西部及び第３トレンチ北東部には竪穴状遺構の存在が想定される。特に第３トレンチ北東部のものはＳＫＩ 54 竪穴建物跡と重複して新しいと思われる。土塁・空堀は台地中央を東西に横断する大規模なものである。遺構は大型のものを中心に部分的に精査を実施したが、柱穴様ピット等、確認プランを記録するに留めたものもある。第２図及び挿図内の表に詳細を記す。

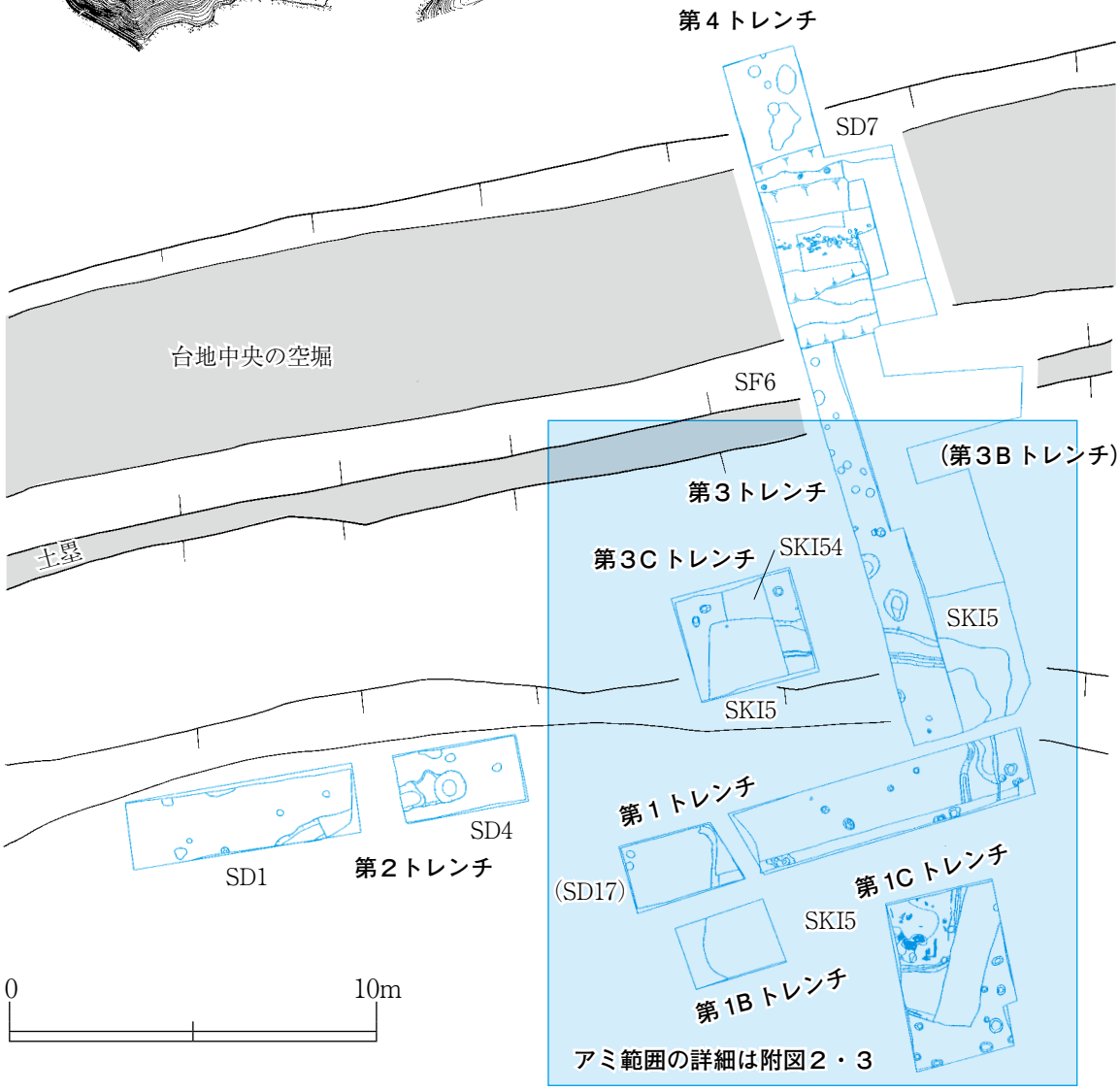
（１）竪穴建物跡

ＳＫＩ５竪穴建物跡（附図２－３）

第１・３トレンチにまたがって位置する。立木により全容は不明であるが、第１Ｂ・１Ｃ・３Ｂ・３Ｃトレンチを設定し、プランの四方隅を確認した。南北 10.4 ｍ×東西 8.2 ｍの長方形プランで、最も深い部分では 60cm を測る。床面は原地形が低い第１・１Ｃ・３トレンチでは大半が貼床されているが、若干高い第３Ｃトレンチでは地山となっている。また第３ＣトレンチではＳＫＩ 54 竪穴建物跡と重複して新しい。壁溝は無いが、壁から１ｍ弱内側に浅い溝が巡っており、第１Ｃトレンチ出土炭化材の確認状況により、この位置に板壁が巡っていたことが確認できた。またこの板壁の溝に沿って内側に深さ 46 ～63cm の主柱穴と考えられる柱穴を６基確認した。主柱穴は重複するもの及び貼床上・下と分けられるため、略長方形を呈する板壁内側に沿って、四隅とそれぞれの中間、及び中央の合計９本で構成されることが想定される。

覆土は一括埋め戻しであるが、始めに周囲（特に東西北辺）から地山ブロック混じりの土を入れ、その後に黒色土で一気に埋め戻されている。平安時代包含層であるⅢ層の上面近くから掘り込まれており、覆土上半～Ⅲ層、そして上位のⅡ層にかけて焼礫が多量出土した。後述する鍛冶関連の遺物と思われる。





第２図　調査区トレンチ詳細図

遺物は須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・鉄製品・鉄滓・焼礫・粘土塊・軽石が出土した。

ＳＫＩ 54 竪穴建物跡(附図２・３)

第３ＣトレンチでＳＫＩ５竪穴建物跡と重複する古いプランとして確認した。Ⅲ層の下半から掘り込まれ、東側に広がるプランとなるため、第３トレンチのサブトレンチ西壁までの広がりは確認できたが、東壁では判然とせず全容は不明である。サブトレンチ内で検出した鍛冶炉は、層序の比較検討によりこの竪穴建物跡の屋内施設と考えられる。炉部分はピット状に掘り下げて炭化物を充填し、床面は広く貼床されている。貼床上の作業面には、凝灰岩質の礫を加工・調製した石製品が散乱していた。科学分析結果からは、十和田火山の鳥越火砕流に伴う流出岩を米代川から採取して使用したことがうかがわれる。断面図にも記載した第６図１は半分ほどの形状を残しており、塼の形状を意識して加工されたことをうかがわせる。床面に柱穴様ピットを検出し一部を精査したが浅く、主柱穴は不明である。

覆土は薄く、最深でも 26cm 程度しか確認できなかったが、重複してＳＫＩ５竪穴建物跡が構築されるため、土圧を受けていることも想定される。

遺物は須恵器(甕)・土師器(坏・甕)・鉄滓・フイゴ羽口・焼礫・粘土塊・軽石が出土した。

(２)溝状遺構

ＳＤ１・４溝状遺構(第３図)

第２トレンチに位置する。トレンチ中央東寄りが立木により調査不能であったため、別々の遺構として精査したが、連続する同一の溝状遺構と考えられる。部分的な精査しか行っていないが、底面に柱穴等は確認できず、溝状遺構とした。確認長が約 5.5 m、最大幅が約 0.9 mで若干弧状となる。Ⅲ層上面近くから掘り込まれるため、ＳＫＩ５竪穴建物跡と同時期以降の構築が想定される。深さは最深で約 60cm である。底面形状は凹凸が激しいが、概ね丸底状である。

遺物は石鏃、須恵器(壺)・土師器(坏・甕)・焼礫が出土した。

ＳＤ 17 溝状遺構(附図２・３)

第１トレンチ西端、ＳＫＩ５竪穴建物跡の西側で検出したが、掘り込みが浅くⅤ層上面(地山面)までほとんど到達しないためプランは不明であるが、南北の断面精査により同様の断面形状を確認できたため、溝状遺構とした。両断面から推定できる確認長が 1.8 m、最大幅が 0.7 m、深さは最深で 30cm である。Ⅳ層(漸移層)から掘り込まれるため、隣接するＳＫＩ５竪穴建物跡より古い時期の構築で、Ⅲ層下半から掘り込まれるＳＫＩ 54 竪穴建物跡よりも古い可能性もある。

プランの検出が遅れたため出土遺物のほとんどはⅢ～Ⅳ層出土として取り上げたが、原位置が確実な遺物としてフイゴ羽口が出土した。

(３)土塁

ＳＦ６土塁(附図３)

第３トレンチ北端で検出した。台地中央を東西に横断している土塁で、並行するＳＤ７空堀の掘削土を用いて南側にのみ構築される。調査区内においては近世以降の開墾により削平され、南側にかけて数m整地されている。両遺構は現況でもよく確認でき、確認長は約 190 mである。調査は約 3.5 m の幅で上面を面的に精査を行い、また約１mの幅で断ち割り精査を行った。土塁の基底幅は５m、現存高さは 0.8 mである。構築土は大きく３層に分けられるが、平安時代包含層であるⅢ層を直接覆う

ため、ＳＫＩ５竪穴建物跡より新しい。土塁構築土は下位から順に暗褐色土→地山ブロック混じり褐色土→地山ブロックによる明黄褐色土となり、概ねⅢ層からⅤ層までの掘削土をそのまま盛土して構築されている(第５図)。土塁頂部に杭状の痕跡を２か所確認したが、時期は不明である。構築土の下～中位から擦文土器が出土している。

遺物は縄文土器・剥片、須恵器(甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・焼礫・フイゴ羽口が出土した。

(４)空堀

ＳＤ７空堀(第４図)

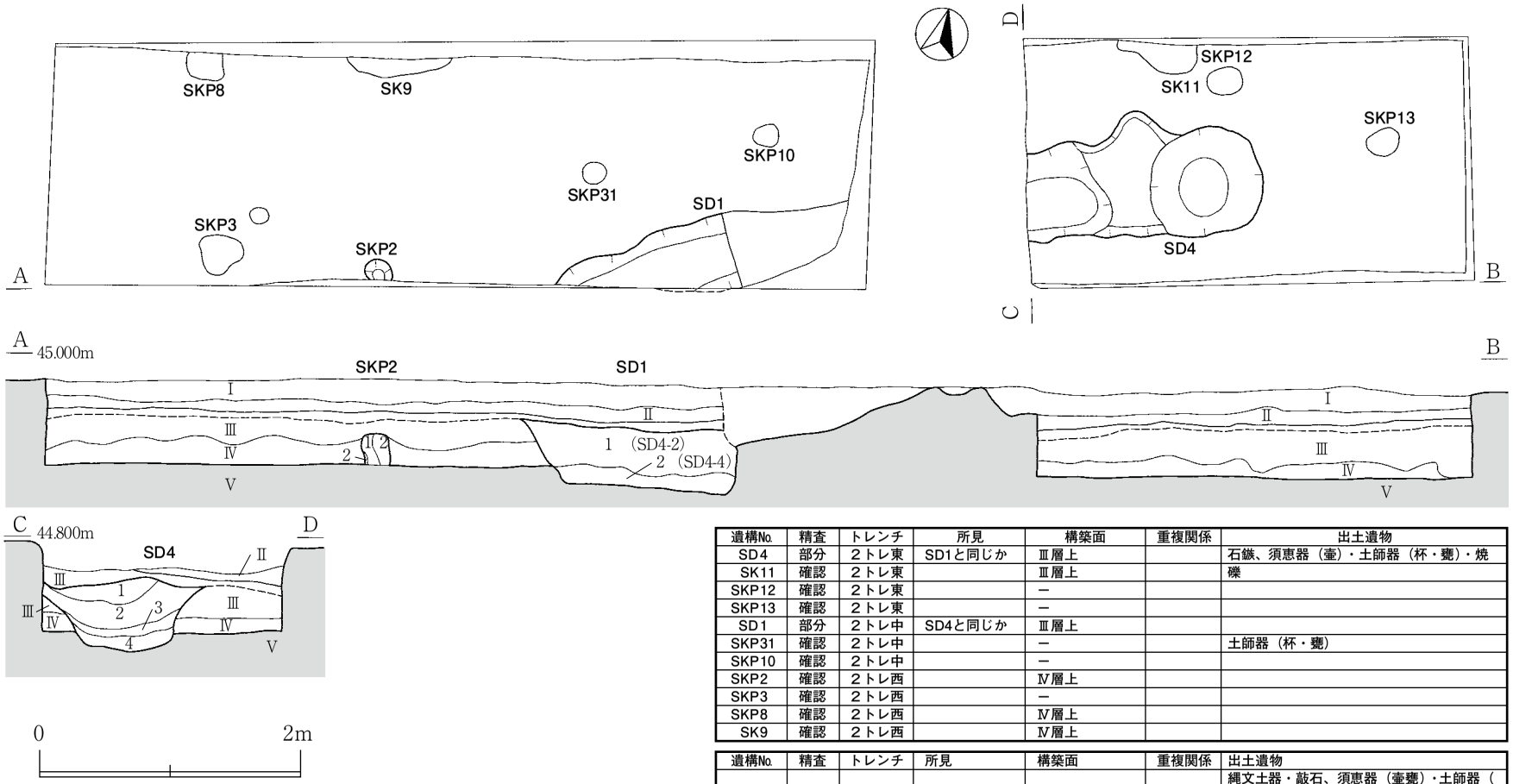
第３・４トレンチの間に位置する。ＳＦ６土塁に並行し、台地中央を東西に横断している。この空堀の掘削土を用いて南側に盛土し、ＳＦ６土塁が構築されている。南側のＳＦ６土塁と比高差約 1.2 m、北側平坦地と比高差約 0.5 mという状態で、現況でも長大な凹地として確認できる。調査は約 2.8 mの幅で面的に精査を行い、第３～４トレンチと連続する断面精査を行ったところ、平安時代包含層のⅢ層上面から掘削して構築されていることが確認できた。Ⅲ層上面を基準として開口部は約 6.3 m、深さは約 1.9 m、底部幅は約 1.4 mで、現況では 1.4 m程度まで埋まっている状況である。断面形状は逆台形の箱堀で、堀底中軸に沿った幅 50cm 程度の凹地に礫群が配されており、精査した範囲で 50 点を確認した。ほとんどは自然礫であるが被熱したものも多く、須恵器大甕破片２点及び砥石破片１点、敲石１点が含まれていた。砥石破片は第１トレンチ西側Ⅲ層(前述したＳＫＩ５竪穴建物跡上面)出土の砥石破片と接合した。また覆土下位から鉄滓も出土している。礫群下位の第 14 層は硬く締まっており、礫を敷いた堀底道と思われる。断面精査のため礫群から 10 点ほどを取り上げた。

遺物は縄文土器・敲石、須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・砥石・鉄滓・焼礫・粘土塊、須恵器系中世陶器(甕)、近世磁器が出土した。

遺構外出土遺物

遺構外からの出土遺物としては、第１(１Ｂ・１Ｃを含む、以下同じ)トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・黒色土器(坏)・内黒土師器(坏)・擦文土器・砥石・鉄製品・鉄滓・焼礫・粘土塊・軽石、近世磁器が、第２トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・鉄滓・焼礫・粘土塊、須恵器系中世陶器(壺)、近世陶磁器が、第３トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・鉄滓・焼礫・粘土塊・軽石、中～近世陶磁器が、第４トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・焼礫・粘土塊・軽石、近世陶磁器が出土した。また須恵器(壺甕)が表面採集された。

須恵器は出土量が少なく、遺構内外から壺甕類のみ 37 点が出土した。土師器では柱状高台を呈する坏も含まれ、概ね 10 世紀代に収まると思われる。擦文土器は 10 世紀後半～11 世紀代のものと思われる。各トレンチから出土したほか、ＳＫＩ５竪穴建物跡及びＳＦ６土塁・ＳＤ７空堀からも出土している。須恵器系中世陶器と思われる破片が２点(壺・甕)出土したが、四耳壺の破片だとすれば新しくても 13 世紀前半代に収まると思われる。



A－B
SD1 1 2トレンチ東、SD4の2層相当 SD1とSD4は同一遺構と考えられる
2 2トレンチ東、SD4の4層相当 SD1とSD4は同一遺構と考えられる
SKP2 1 10YR3/3 暗褐色シルト層 炭中粒中量含む 柱アタリか
2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト層 地山大粒多量含む 裏込め土

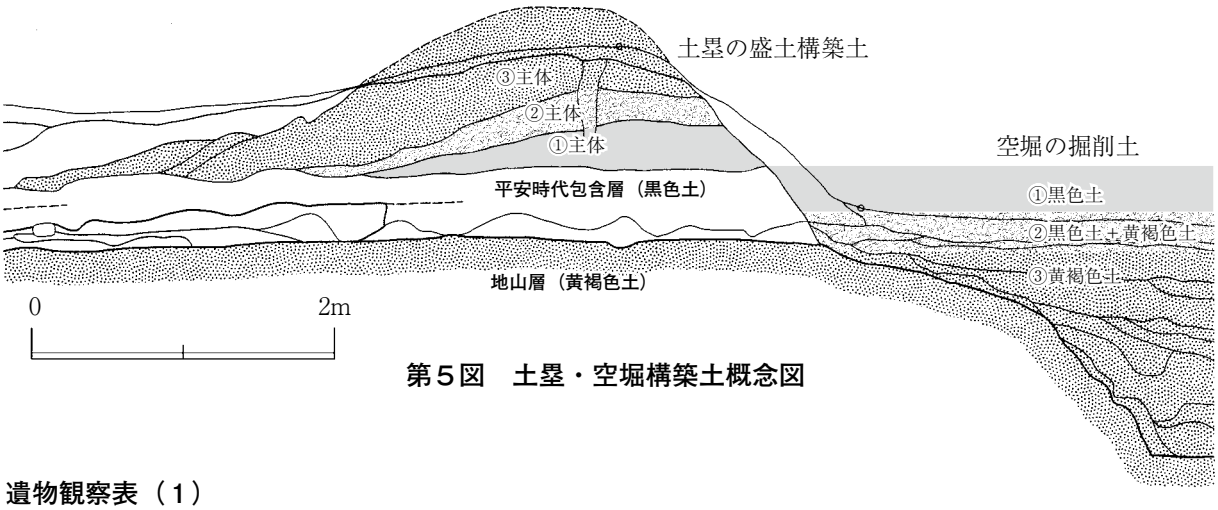
C－D
SD4 1 10YR2/3 黒褐色シルト層 地山小粒多量含む 炭中粒少量含む 一括埋め戻し土か
2 10YR3/4 暗褐色シルト層 地山中粒多量含む 炭小粒中量含む 焼土中粒多量含む Ⅲ層に似る 一括埋め戻し土か
3 10YR3/4 暗褐色シルト層 地山小粒少量含む 炭小粒中量含む 焼土小粒中量含む 流入土か
4 地山大粒多量含む 炭大粒多量含む 褐色～黒色シルト層 地山大粒と炭大粒が斑状に混在する 一括埋め戻し土か

遺構No.	精査	トレンチ	所見	構築面	重複関係	出土遺物
SD4	部分	2トレ東	SD1と同じか	Ⅲ層上		石鏃、須恵器（壺）・土師器（杯・甕）・焼
SK11	確認	2トレ東		Ⅲ層上		礫
SKP12	確認	2トレ東		－		
SKP13	確認	2トレ東		－		
SD1	部分	2トレ中	SD4と同じか	Ⅲ層上		
SKP31	確認	2トレ中		－		土師器（杯・甕）
SKP10	確認	2トレ中		－		
SKP2	確認	2トレ西		Ⅳ層上		
SKP3	確認	2トレ西		－		
SKP8	確認	2トレ西		Ⅳ層上		
SK9	確認	2トレ西		Ⅳ層上		

遺構No.	精査	トレンチ	所見	構築面	重複関係	出土遺物
SD7	部分	3～4トレ		Ⅲ層上から切る	6＝7	縄文土器・敲石、須恵器（壺甕）・土師器（杯・甕）・擦文土器・砥石・焼礫・粘土塊・須恵器系中世陶器（甕）、近世磁器
SK28	確認	4トレ		－		
SK29	確認	4トレ	焼土多量含む	－		
SKP30	確認	4トレ		－		
SKP32	確認	4トレ		－		
SKP33	確認	4トレ		－		
SK59	部分	4トレ		Ⅲ層中		

第３図　第２トレンチの遺構と土層図

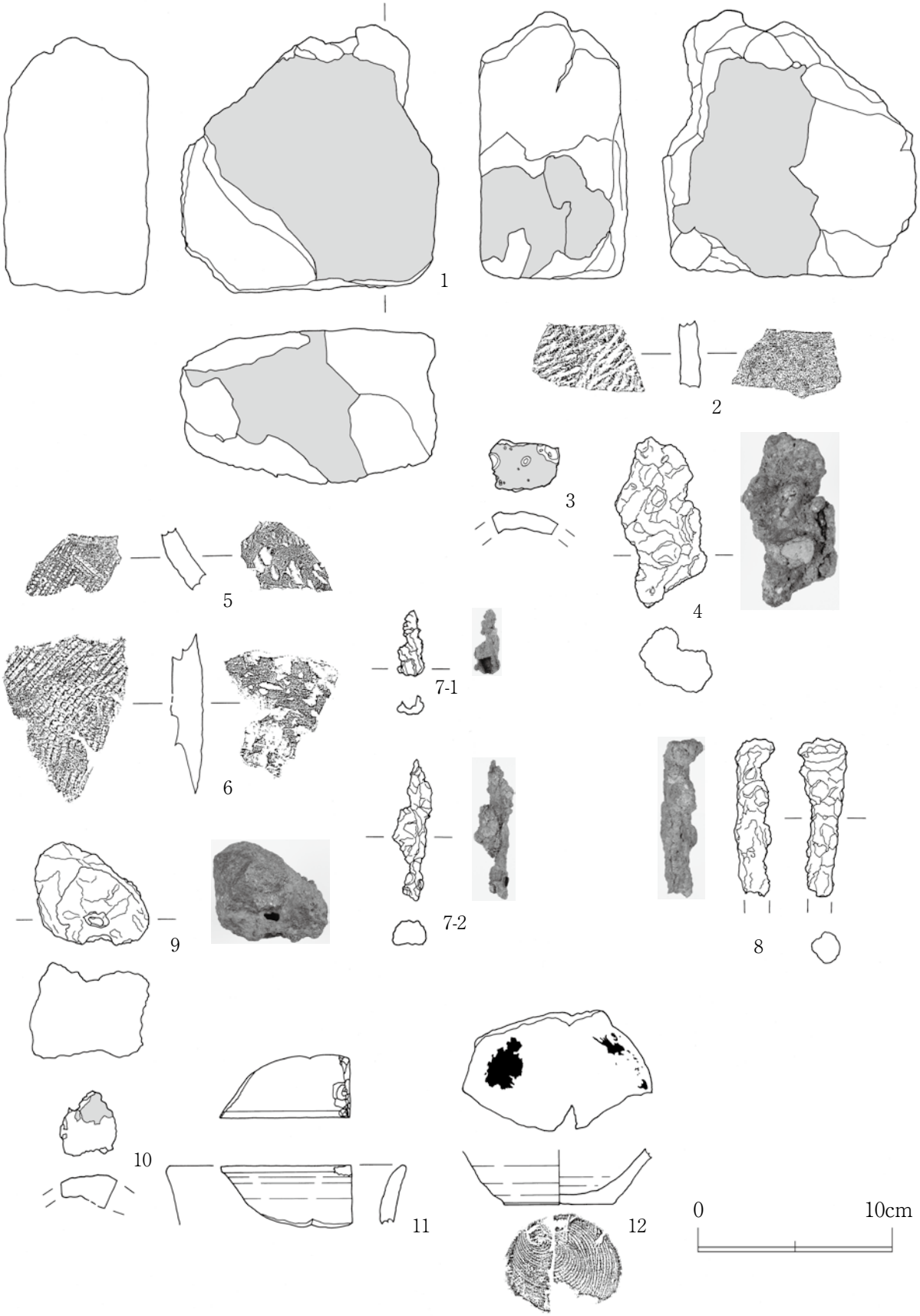
第４図　ＳＤ７空堀・第４トレンチの遺構と土層図



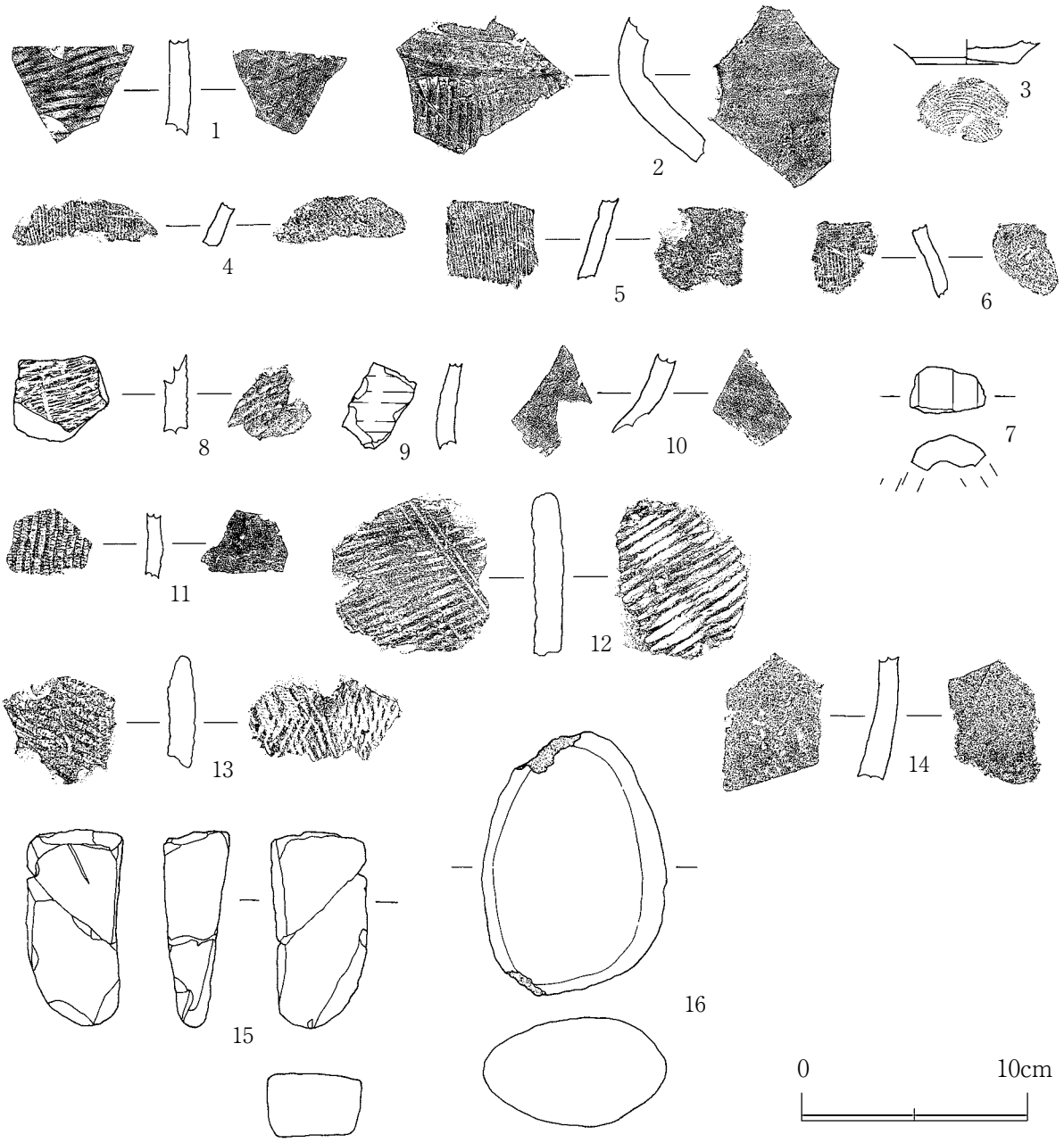
第５図　土塁・空堀構築土概念図

遺物観察表（１）

	出土位置	器　種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	備　　考
第６図１	第３トレンチ サブトレ SKI54 炉 S3	塼					
第６図２	第３トレンチ サブトレ かまど拡張部 Ⅲ層	須恵器甕	平行叩き目	ナデ	－	灰色	
第６図３	第3C トレンチ Ⅲ層 RQ2 羽口	フイゴ羽口					
第６図４	第３トレンチ SKI54 RI1	鉄滓					
第６図５	第１トレンチ東Ⅲ層	須恵器甕	平行叩き目	（爪？）	－	褐色	
第６図６	第１トレンチ SKI5 RP1	須恵器甕	平行叩き目	－	－	にぶい黄橙色	剥落大
第６図７	第３トレンチ サブトレンチ拡張 SKI5 覆土中	鉄製品					
第６図８	第1C トレンチ SKI5（鉄製品）	釘					
第６図９	第３トレンチ南 Ⅳ層	鉄滓					
第６図10	第１トレンチ西 Ⅴ層上面 SD17 RQ1	フイゴ羽口					
第６図11	第２トレンチ SD4	須恵器壺	ロクロ目	ロクロ目	－	黒褐色	
第６図12	第２トレンチ Ⅳ層　２トレンチ SD4	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	にぶい黄橙色	内タール付着
第７図１	第３トレンチ北 土塁地山盛土下の黒	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	灰色	
第７図２	第３トレンチ北 Ⅰ層	須恵器甕	平行叩き目	ロクロ目	－	オリーブ黒色	
第７図３	第３トレンチ北 SF6 土塁Ｃ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	橙色	
第７図４	第３トレンチ中 SF6 地山盛土下の黒	擦文土器甕	刷毛目	刷毛目	－	褐灰色	
第７図５	第３トレンチ中 SF6 土塁地山盛土下の黒	擦文土器甕	刷毛目	？	－	にぶい黄橙色	
第７図６	第３トレンチ中 SF6 地山盛土下の黒	擦文土器甕	刷毛目	？	－	にぶい黄褐色	
第７図７	第３トレンチ中 SF6 地山盛土下の黒	フイゴ羽口					
第７図８	SD7 Ⅰ層	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	明赤褐色	
第７図９	SD7 覆土２層	須恵器壺	ロクロ目	ロクロ目	－	黒色	
第７図10	SD7 空堀 覆土中位	須恵器壺	ロクロ目	ロクロ目	－	褐灰色	
第７図11	SD7 空堀 覆土中位	須恵器甕	平行叩き目	ナデ	－	黒褐色	
第７図12	SD7 RP20	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	褐灰色	
第７図13	SD7 RP40	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	オリーブ褐色	
第７図14	SD7 排土中 中位か？	須恵器系中世陶器？甕	ナデ	ナデ	－	褐灰色	
第７図15	SD7 S31 トレンチ西 Ⅲ層	砥石					２点接合
第７図16	SD7 S10	敲石					上下に敲打痕
第８図１	第１トレンチ西 Ⅳ層	黒色土器坏	ミガキ	ミガキ	－	黒色	
第８図２	第１トレンチ東 Ⅳ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	橙色	
第８図３	第１トレンチ西 Ⅳ層	擦文土器甕	刷毛目	刷毛目（→ナデ？）	－	にぶい黄橙色	
第８図４	第１トレンチ西 Ⅲ層	内黒土師器坏	ロクロ目	ミガキ	回転糸切り	にぶい黄橙色	
第８図５	第１トレンチ西 Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	－	回転糸切り	灰白色	磨滅
第８図６	第1C トレンチ Ⅲ層	土師器甕	ケズリ	？	－	褐色	非ロクロ調整
第８図７	第1B トレンチ Ⅱ～Ⅲ層	擦文土器甕	刷毛目	刷毛目	ナデ？	赤褐色	
第８図８	第１トレンチ西 Ⅲ層	塼					
第８図９	第２トレンチ東 Ⅳ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	灰黄色	
第８図10	第２トレンチ東 Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	橙色	
第８図11	第２トレンチ東 Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	にぶい褐色	柱状高台
第８図12	第２トレンチ東 Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	－	－	橙色	磨滅大
第８図13	第２トレンチ西 Ⅲ層	土師器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	黄褐色	
第８図14	第２トレンチ西 Ⅱ層	土師器甕	ロクロ目、沈線	ロクロ目	－	明赤褐色	
第８図15	第２トレンチ東 Ⅱ層	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	明赤褐色	
第８図16	第２トレンチ西 Ⅱ層	土師器坏	ロクロ目	－	－	明赤褐色	磨滅大
第８図17	第２トレンチ西 Ⅱ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	褐色	
第８図18	第２トレンチ西 Ⅱ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	褐灰色	
第８図19	第２トレンチ西 Ⅱ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	－	浅黄橙色	内外ロクロ目凹凸、磨滅
第８図20	第２トレンチ西 Ⅱ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	橙色	柱状高台
第８図21	第２トレンチ西 Ⅱ層	土師器甕	ロクロ目、ナデ	ロクロ目	－	褐色	
第８図22	第２トレンチ東 Ⅱ層	須恵器系中世陶器？壺	ロクロ目	ロクロ目	－	灰色	
第８図23	第２トレンチ西 Ⅱ層	近世陶器？	ロクロ目	－		灰黄褐色	



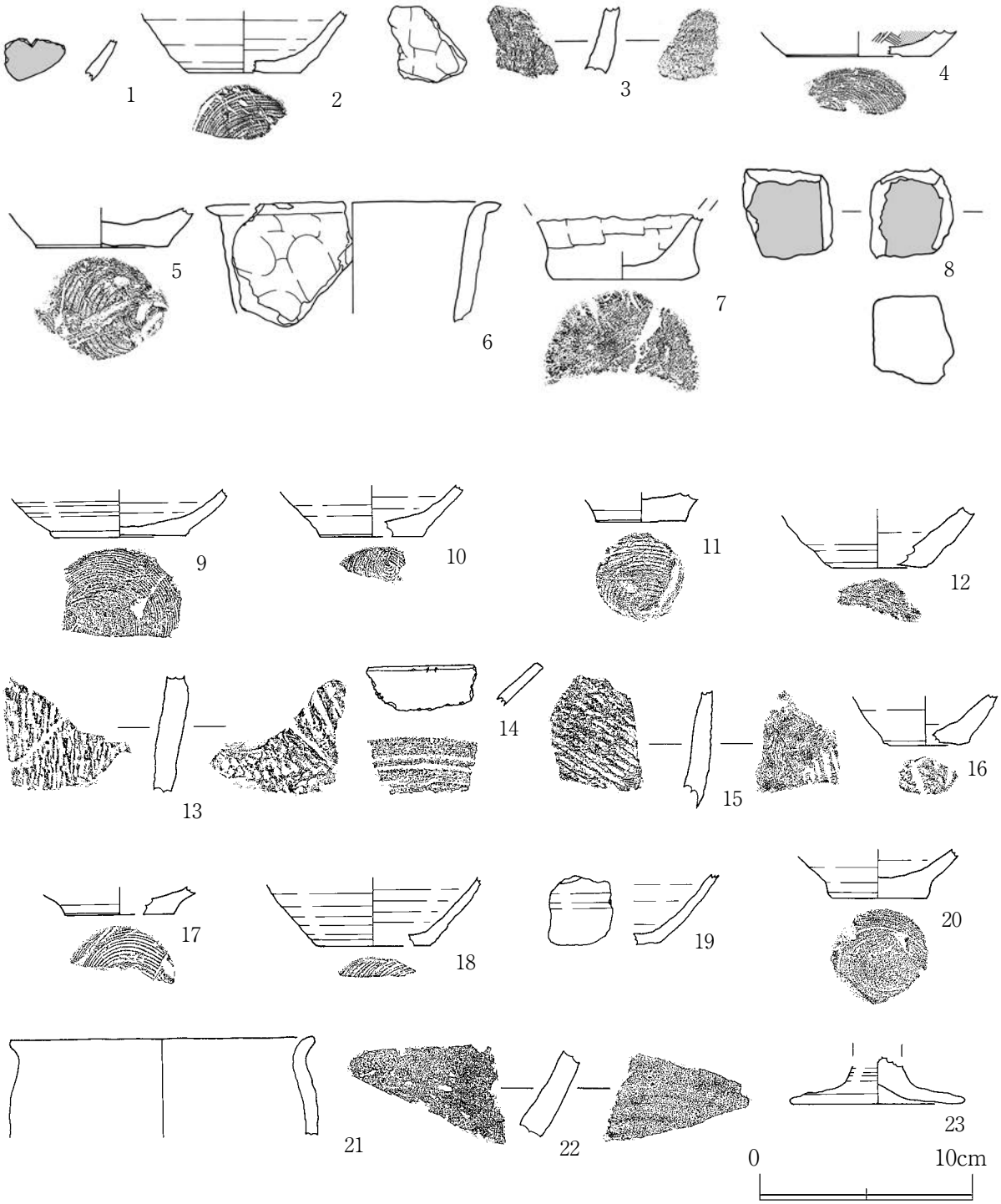
第６図　遺構内出土遺物（１）



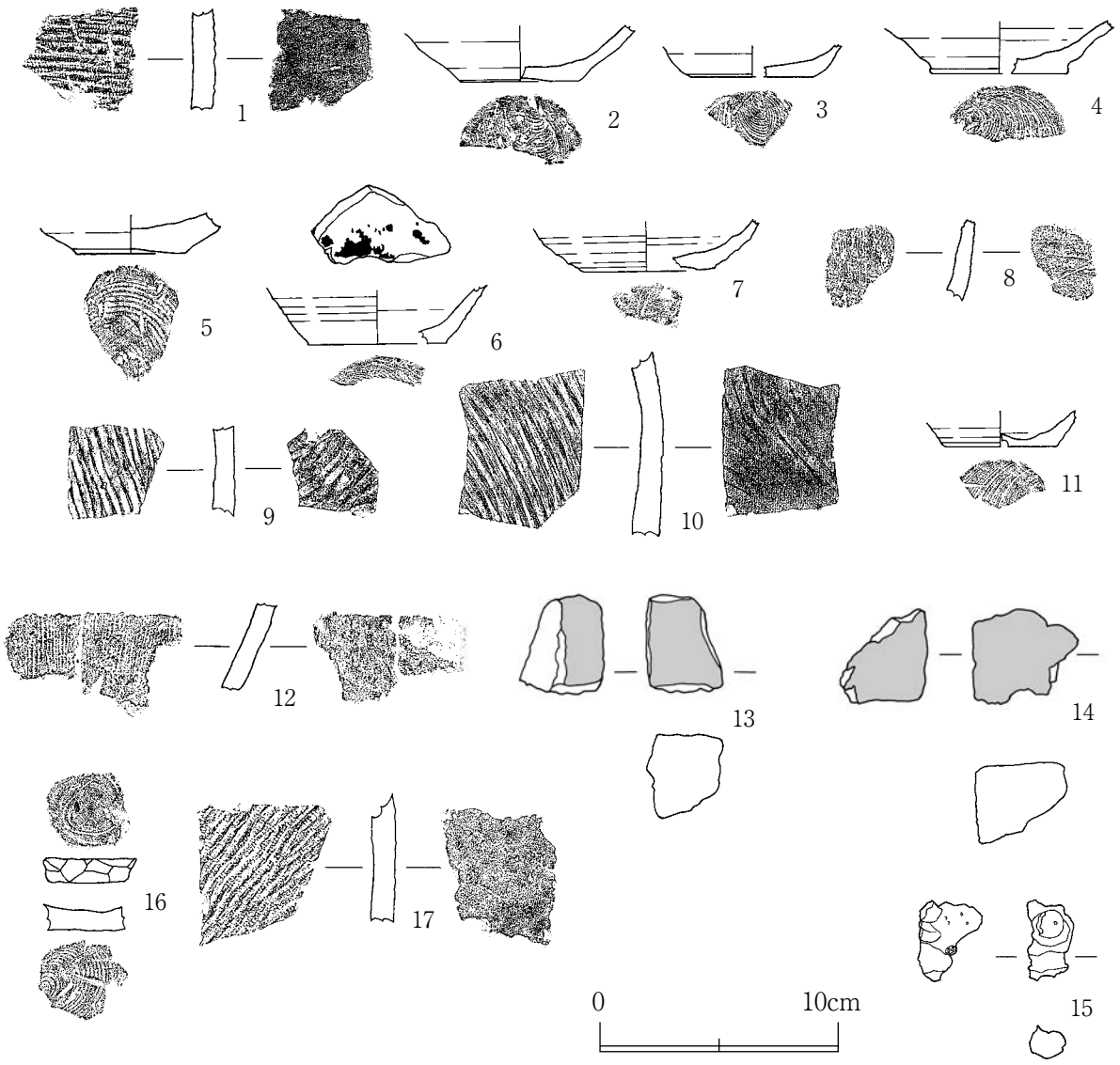
第７図　遺構内出土遺物（２）

遺物観察表（２）

	出土位置	器　種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	備　　考
第９図１	第 3C トレンチ 旧表土～Ⅲ上面（SF6 崩落土）	須恵器甕	平行叩き目	ナデ	－	灰色	
第９図２	第 3C トレンチ Ⅲ層拡張部	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	にぶい黄橙色	
第９図３	第 3C トレンチ 旧表土～Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	灰黄褐色	内タール付着
第９図４	第 3C トレンチ 旧表土～Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	にぶい黄橙色	
第９図５	第 3C トレンチ 旧表土～Ⅲ層	土師器甕	ロクロ目	ケズリ	回転糸切り	にぶい黄褐色	
第９図６	第 3C トレンチ 旧表土～Ⅲ層上面（SF6 崩落土）	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	にぶい褐色	外ロクロ目凹凸、内タール付着
第９図７	第３トレンチ北 サブトレンチ SF6 下旧表土	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	－	にぶい橙色	磨滅
第９図８	第 3C トレンチ Ⅲ層	擦文土器甕	刷毛目	刷毛目	－	褐色	
第９図９	第 3B トレンチ SF6 崩落土～Ⅲ層	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	黒褐色	
第９図 10	第 3B トレンチ SF6 崩落土中	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	褐灰色	
第９図 11	第３トレンチ中 SF6 崩落土～下の黒	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	にぶい褐色	
第９図 12	第３トレンチ中 SF6 崩壊土～下の黒	擦文土器甕	刷毛目	刷毛目	－	にぶい褐色	
第９図 13	第 3C トレンチ Ⅲ層 第 3C トレンチ	塼					
第９図 14	第３トレンチ中 SF6 崩落土～下の黒（塼）	塼					
第９図 15	第 3C トレンチ 旧表土～Ⅲ層上面（SF6 崩落土）	釘					
第９図 16	第４トレンチ北 Ⅲ層	土師器坏	－	ロクロ目	回転糸切り	橙色	柱状高台？
第９図 17	第４トレンチ 排土中	須恵器甕	平行叩き目	ナデ	－	黒色	



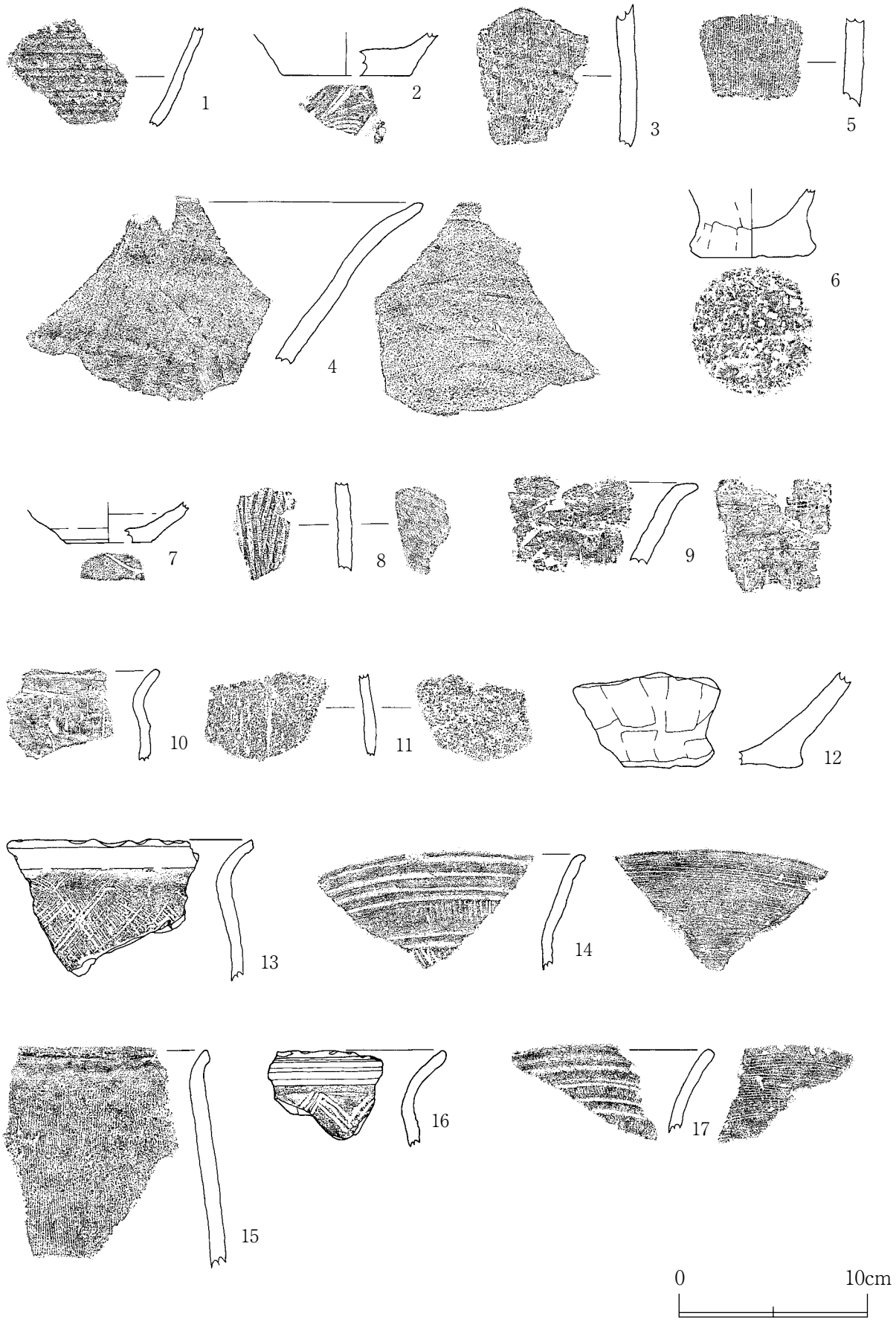
第８図　遺構外出土遺物（１）



第９図　遺構外出土遺物（２）

遺物観察表（３）

	出土位置	器　種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	備　　考
第 10 図 1	7ANO J3T ﾀﾃ 8 3 ﾀﾃ S48.8.7	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	−	にぶい黄褐色	外ロクロ目凹凸
第 10 図 2	7ANO J3T ﾀﾃ 097 8 3 ﾀﾃ S48.8.10	土師器甕	ケズリ	ロクロ目	回転糸切り	橙色	
第 10 図 3	7ANO J ﾀﾃ内ｶﾏﾄﾞ 8 3 ﾀﾃ S48.8.27	土師器甕	ケズリ	?	−	褐色	
第 10 図 4	7ANO J3T ﾀﾃ 8 3 ﾀﾃ S48.8.6	土師器鍋	ナデ？	ナデ	−	灰黄褐色	
第 10 図 5	7ANO ? 8 3 ﾀﾃ S48.8.6	擦文土器甕	刷毛目	?	−	灰黄褐色	
第 10 図 6	J 区第 3T 竪穴 197 8 3 ﾀﾃ 8/17	擦文土器甕	刷毛目	刷毛目	砂底？	明赤褐色	
第 10 図 7	7ANO S48.7.20 A3 西南 10 ﾀﾃ	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	−	橙色	磨滅
第 10 図 8	7ANO S48.7.20 A3 西南 10 ﾀﾃ	土師器甕	平行叩き目	?	−	にぶい橙色	
第 10 図 9	7ANO S48.7.19 A3 ﾄﾚ南西 第 10 ﾀﾃ 7ANO S48.7.19 A? 南西 第 10 ﾀﾃ	土師器鍋	ケズリ	ミガキ	−	明赤褐色	
第 10 図 10	7ANO S48.7.20 A3 西南 10 ﾀﾃ 焼土中	土師器甕	ケズリ	?	−	黒色	
第 10 図 11	7ANO S48.7.20A3?10 ﾀﾃ	擦文土器甕	刷毛目	−	−	橙色	
第 10 図 12	7ANO S48.7.20 A3 西南 10 ﾀﾃ 焼土	擦文土器甕	刷毛目	−	−	橙色	
第 10 図 13	7ANO J4 6 ﾀﾃ 118	擦文土器甕	刷毛目	−	−	にぶい褐色	斜格子状
第 10 図 14	7ANO S48.8.24 126 J4 5 ﾀﾃ	擦文土器甕	沈線＋刻線文	刷毛目	−	にぶい橙色	内面黒色処理？
第 10 図 15	7ANO J 区 S48.8.6 J3T 128	擦文土器甕	刷毛目	−	−	にぶい褐色	胴部上半内傾
第 10 図 16	7AN0 S48.8.30 J4T ｶﾏ● 140	擦文土器甕	浅沈線＋刻線文	−	−	橙色	
第 10 図 17	7ANO S48.8.10 J 第 4T 拡張ｶﾏ 143	擦文土器甕	刷毛目	刷毛目	−	にぶい赤褐色	



第 10 図　過年度調査出土遺物

第３節　自然科学的分析

大館跡におけるテフラの検出同定

はじめに

能代市田床内に所在する大館跡は、米代川支流の檜山川中流域右岸に分布する台地上に位置する。内藤 (1977) による能代平野の地形分類図によれば、大館跡の載る台地は、12 ～13 万年前の最終間氷期最盛期に形成された海成段丘である畑谷Ⅰ面に区分されている。発掘調査では、平安時代とされる住居跡などの多数の遺構が検出され、集落跡であると考えられている。

本報告は、それらの遺構に関わる年代資料を得ることを目的として、遺構覆土および包含層より噴出年代の明らかにされている指標テフラの検出とその同定を行うものである。

１　試料

試料は、大館跡第７次調査の調査区内で検出された遺構の覆土および包含層から採取された土壌７点である。試料には、試料番号１～7 が付されている。試料番号１は、SKI5 の床直から採取された黒褐色を呈する土壌いわゆる黒ボク土であり、径数 mm 程度の褐色シルト塊いわゆるローム粒を比較的多く含んでいる。試料番号２は、炉跡とされた SKI54 の床直から採取された黒ボク土であり、外見は上記の試料番号１とほぼ同様である。試料番号３は同じ遺構の SKI54 の火山灰層とされた層位から採取された黒褐色を呈するシルト混じりの細砂～極細砂である。褐色～赤褐色を呈するシルト塊も含まれている。試料番号４～6 は、第３トレンチサブトレンチのⅢ層から採取された黒色を呈する黒ボク土であり、順に上部、中部、下部とされている。試料番号１や２で認められたローム粒は含まれていない。試料番号７は SD7 の 14 層から採取された暗褐色を呈する黒ボク土であり、ローム粒も少量含まれている。

なお、SKI5、SKI54 は古代の遺構と考えられており、第３トレサブトレⅢ層も古代の層と考えられている。SD7 については推定時期は不明とされている。

２　分析方法

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

３　結果

分析結果を表２に示す。火山ガラスは、試料番号１～3 に微量、試料番号４～7 には極めて微量認められた。いずれの試料においても無色透明のバブル型と無色透明の軽石型が混在し、試料番号５と７以外の試料には、褐色を呈するバブル型および軽石型も極めて微量認められた。軽石は、試料番号

3 に少量、試料番号 2 と 4 には極めて微量、他の試料には認められなかった。試料番号 3 の軽石は、最大径約 2.8mm、灰色～暗灰色を呈し、発泡しているが、自然に見られる発泡ではなく、高温により溶融し、再発泡したものである。炉跡であるとされていることから、その熱の影響であると考えられる。試料番号 2 および 4 の軽石は、最大径 2 ～3mm、白色を呈し、発泡は自然のものであり、やや不良である。スコリアは、いずれの試料からも検出されなかった。なお、全点ともに砂分中には、テフラの遊離結晶に由来すると考えられる比較的新鮮で自形を呈する斜方輝石および角閃石の鉱物粒が認められた。

各試料の火山ガラスの屈折率測定結果を図 11 に示す。試料番号 1 と試料番号 3 では、屈折率のレンジを決定できるだけの充分な量の火山ガラスを抽出することができた。試料番号 1 の火山ガラスは、n1.500-1.510 のレンジを示し、モードは n 1.506 前後、試料番号 3 の火山ガラスは、n1.501-1.509 のレンジを示し、モードは n1.504-1.505 である。他の試料については、火山ガラスが極めて微量なため、レンジを確定することはできないが、いずれの試料も n1.500 ～1.505 の値を示す傾向が窺える。

第２表　テフラ分析結果

試料番号	調査次数	出土遺構	出土位置	スコリア	火山ガラス		軽石		
				量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
1	OD-A(第 7 次)	SKI5	床直	−	+	cl･bw,cl･pm>br･pm	−		
2	OD-A(第 7 次)	SKI54	床直	−	+	cl･bw,cl･pm>br･bw,br･pm	(+)	W･sb	2.0
3	OD-A(第 7 次)	SKI54	火山灰層	−	+	cl･bw,cl･pm,br･pm	＋＋	G ～ DG･sb	2.8
4	OD-A(第 7 次)	3 トレサブトレ	Ⅲ層 (上)	−	(+)	cl･bw,cl･pm>br･pm	(+)	W･sg	3.0
5	OD-A(第 7 次)	3 トレサブトレ	Ⅲ層 (中)	−	(+)	cl･bw,cl･pm	−		
6	OD-A(第 7 次)	3 トレサブトレ	Ⅲ層 (下)	−	(+)	cl･bw,cl･pm,br･bw,br･pm	−		
7	OD-A(第 7 次)	SD7	14 層	−	(+)	cl･bw,cl･pm	−		

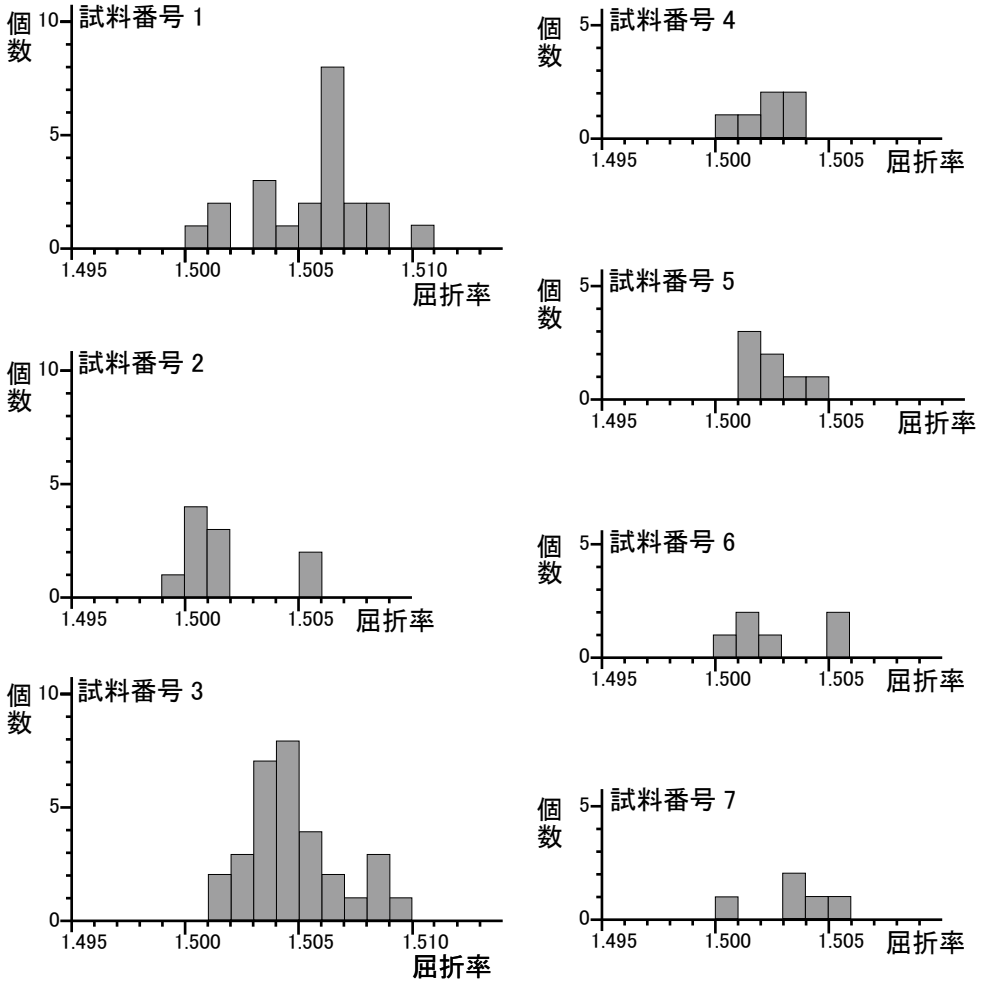
凡例　－ : 含まれない．(+): きわめて微量．＋ : 微量．＋＋ : 少量．＋＋＋ : 中量．＋＋＋＋ : 多量．
g: 良好．sg: やや良好．sb: やや不良．b: 不良．最大粒径は mm.
cl: 無色透明．br: 褐色．bw: バブル型．md: 中間型．pm: 軽石型．
G: 灰色．DG: 暗灰色．W: 白色．

4　考察

試料 7 点から検出された火山ガラスは、その形態と色調および屈折率の傾向から、同一のテフラに由来する可能性が高い。これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状 (町田ほか (1981;1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井 (2003) など) と大館跡の地理的位置を考慮すると、前述した特性を持つ火山ガラスの由来するテフラは、十和田カルデラを給源とする十和田八戸テフラ (To-H:Hayakawa,1985) あるいは十和田 a テフラ (To-a: 町田ほか ,1981) のいずれかであると考えられる。各テフラの噴出年代は、To-H は 1.5 万年前、To-a は西暦 915 年とされている (町田・新井 ,2003)。両テフラ間で異なる特性としては、To-H には重鉱物組成に角閃石が含まれているが、To-a には含まれていないことである。今回の試料では、角閃石斑晶を包有した軽石あるいは火山ガラスを認めることはできなかったが、遊離結晶と考えられる角閃石の鉱物粒はいずれの試料からも認められている。また、試料番号 4 ～6 が採取されたⅢ層は、典型的な黒ボク土の外見を呈することから、明らかに完新世以降に形成された土壌であり、発掘調査所見では古代という年代が推定されている。町田・新井

(2003) に示されたテフラの等層厚線図などを参照すれば、大館跡付近に降灰した To-a の層厚は数 cm 程度と推定される。大館跡は上面の平坦な段丘上に位置するから、降灰後の To-a は撹乱を受けるにしても流失する割合は低いと考えられるから、To-a 降灰後の黒ボク土中には多量の To-a に由来する砕屑物が含まれていると考えられる。したがって、火山ガラスが極めて微量しか含まれていないⅢ層は、To-a 降灰以前の黒ボク土である可能性が高い。角閃石の鉱物粒も伴うことを考慮すれば、そこに含まれている火山ガラスは、上位の To-a からの拡散というよりも、下位の To-H からの再堆積物である可能性の方が高い。さらに、試料番号 1 ～3 ではいわゆるローム粒の含有が認められたが、これらの試料では火山ガラスの含有量もⅢ層に比べて多い傾向を示している。このことは、火山ガラスがローム粒に由来する可能性のあることを示唆している。

以上の状況を合わせれば、今回の 7 点の試料から検出された火山ガラスは、全て To-H に由来すると考えられ、軽石も同様であろう。この場合、上述したようにⅢ層は、To-a 降灰以前すなわち 10 世紀初頭以前の包含層に対比される。また、SKI5 や SKI54 および SD7 の各遺構は、To-a の火山ガラスが含まれない黒ボク土で埋積されていることから、To-a 降灰以前にすでに遺構が廃棄されて埋積が開始されていた可能性がある。すなわち、これらの遺構の構築年代は、10 世紀初頭よりも古い可能性が高いと考えられる。



第 11 図　火山ガラスの屈折率

引用文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan Ⅱ -Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.

古澤　明 ,1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別 . 地質学雑誌 ,101,123-133.

Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60 ,507-592.

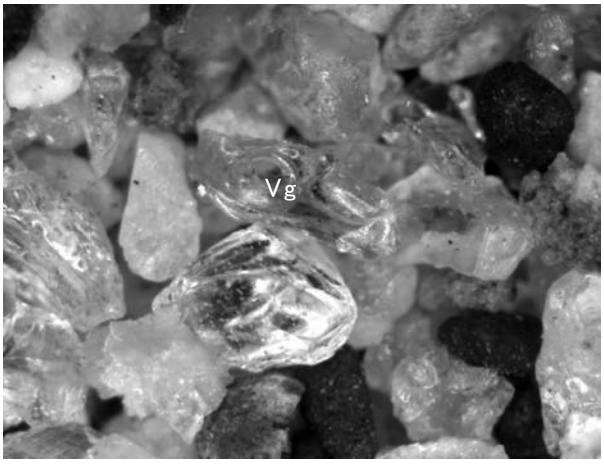
町田　洋・新井房夫 ,2003, 新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広 ,1981, 日本海を渡ってきたテフラ . 科学 ,51,562-569.

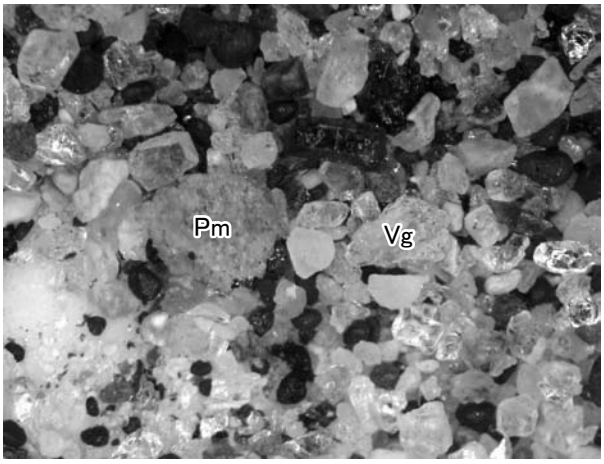
町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 ,1984, テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－渡辺直経 (編) 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 . 同朋舎 ,865-928.

内藤博夫 ,1977, 秋田県能代平野の段丘地形 . 第四紀研究 ,16,57-70.

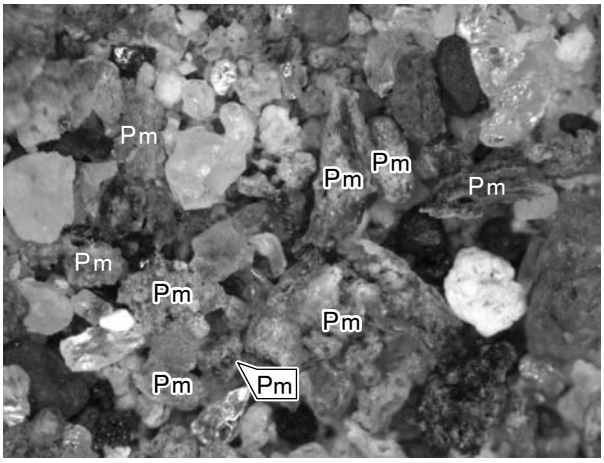
図版２　テフラ



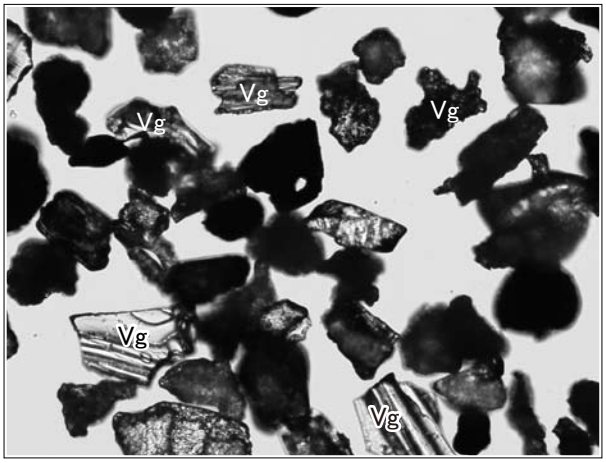
1.砂分中の火山ガラス(試料番号1;OD-A第7次SKI5床直)



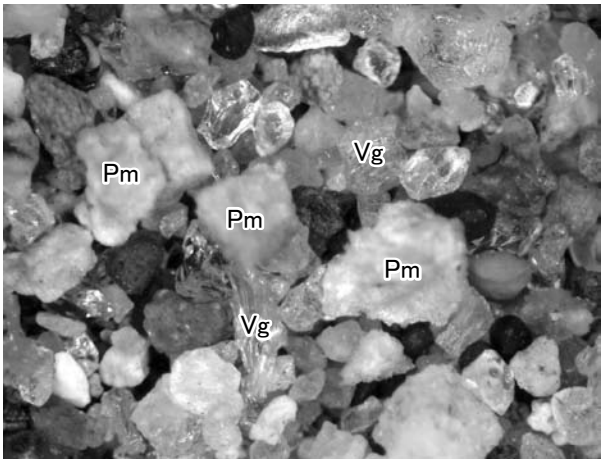
2.砂分中の軽石(試料番号2;OD-A第7次SKI54床直)



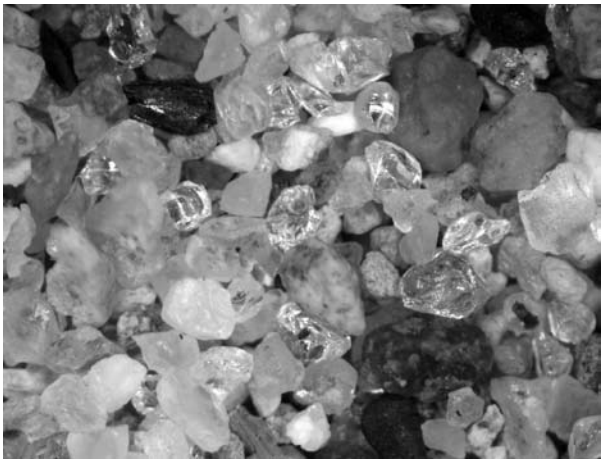
3.砂分中の軽石(試料番号3;OD-A第7次SKI54火山灰層)



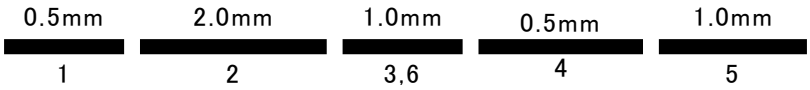
4.火山ガラス(試料番号3;OD-A第7次SKI54火山灰層)



5.砂分中の軽石・火山ガラス(試料番号4;OD-A第3トレンチサブトレンチⅢ層(上))
Pm:軽石. Vg:火山ガラス.



6.砂分の状況(試料番号7;OD-A第7次SD7;14層)



第４節　小結

大型のＳＫＩ５竪穴建物跡からは土師器と擦文土器が共伴した。このＳＫＩ５は第３トレンチのサブトレンチ及び第３ＣトレンチでｓＫＩ 54 竪穴建物跡と重複して新しいことを確認し、前者は平安時代包含層であるⅢ層の上面近くから、後者は下位から掘り込まれていた。第３トレンチサブトレンチ内確認の鍛冶炉はＳＫＩ 54 竪穴建物跡内部の施設であり、鉄滓や羽口、鍛造剥片の出土から鍛冶工房と考えられる。一方、約 10 ｍ×８ｍという規模を有するＳＫＩ５からも鉄製品や鉄滓、羽口及び鍛造剥片が出土しており、同様に鍛冶工房と思われる。壁から１ｍ弱内側には板壁が巡り、その内側に沿って９本の柱で上部構造を支える構造をとると思われ、壁立式の建物となる可能性も想定できる。トレンチ調査のため全容は不明であるが、建物内部が広く、板壁で内部が仕切られる構造をとった可能性も考えられるのではないだろうか。

今回の調査区からは、遺構内外を問わず火山灰は確認できなかったが、大館跡から東方へ約１km 離れた鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡では、竪穴建物跡の埋まりきらない凹みに 10cm 程度の白頭山火山灰が堆積していたことが報告されている。しかし調査区周辺の旧地表面等から火山灰は確認されず、短期間のうちに流失したものと考えられる。

本調査区においても火山灰は確認できなかったため、この２棟の竪穴建物跡は白頭山火山灰降灰後の構築と考えられ、擦文土器を伴わないＳＫＩ 54 が降灰後の 10 世紀中頃まで、擦文土器を伴い重複して新しいＳＫＩ５がそれ以降の構築と想定される。

ＳＦ６土塁は前述したⅢ層に直接盛土構築されているが、土塁構築土は下位からⅢ層主体の黒色土→地山（Ⅴ層）主体の黄褐色土となっており、断面観察からも並行するＳＤ７空堀の掘削土を逐次用いて南側に盛土構築されたものと考えられる（第５図）。また構築土の下～中位から擦文土器を出土することや、堀底道に敷かれた礫群中の砥石破片と、ＳＫＩ５確認面直上のⅢ層中出土砥石破片とが接合したことからも、ＳＫＩ５廃絶（埋め戻し）後、そう下らない時期に土塁・空堀が構築されたと思われる。ＳＤ７埋土中を含め調査区内から須恵器系中世陶器と思われる破片が２点出土したが、15 世紀末に成立とされる檜山城とは大きく時期が開き、13 世紀代までには概ね埋没した状態となったと思われる。

能代市教育委員会所蔵の過年度調査遺物を精査したところ、９世紀後半代以降の須恵器・土師器以外に、一定量の擦文土器が含まれていることを確認した。第 10 図に示したように、竪穴建物跡出土の一括遺物で土師器と共伴するものも多く、また遺構外出土遺物では表土付近での出土を多く確認できたため、今回の調査結果に調和的である。

今回の調査では台地中央を横断する土塁・空堀が、擦文土器が出土する時期からそう下らない時期に構築された可能性を指摘することができた。小規模の調査でもあり時期を決定するには至らないが、従来からの遺跡の評価に対し、新しい可能性を示すことができたことはひとつの成果といえる。

図版3

大館跡周辺の地形と米代川・檜山川

図版4

（2008 年撮影、能代市提供）

図版5

調査区現況（西→）
台地中央を東西に横断するＳＤ７空堀と南側に並行するＳＦ６土塁は、現況でも比高差が1.2ｍほどあり、容易に確認できる。北側には土塁は構築されず、0.5ｍ程度の比高差となる。

調査区現況（西→）
ＳＦ６土塁は近世以降に削平され、一定の高さで数m程度南側に整地されている。

台地南側の大空堀（西→）
台地上は約13万㎡の平坦地となっているが、南側と南東側の張り出し部を大型の空堀が区切っている。現況でも開口部が10ｍ弱、深さが４ｍ程度の規模を有する。

図版６

ＳＫＩ５竪穴建物跡
確認状況（西→）
第１トレンチで幅８ｍにもおよぶ長大なプランを確認した。サブトレンチを入れたところ一様な平坦面を呈し、竪穴の四隅を探すためのトレンチを新たに設定した。

ＳＫＩ５竪穴建物跡
確認状況（北→）
第１Ｂトレンチ（写真奥）で南西隅を確認した状況。手前は第１トレンチ。

ＳＫＩ５竪穴建物跡
断面状況（北→）
第１トレンチ西側、南壁断面の断面状況。Ⅲ層上面近くから掘り込まれ、貼床が施されている。

図版7

ＳＫＩ５竪穴建物跡
確認状況（南→）
第３Ｂトレンチ（写真奥）で北東隅を確認した状況。サブトレンチを設定し精査した。壁より１ｍ弱内側に溝が巡る。

ＳＫＩ５竪穴建物跡
確認状況（西→）
第３Ｂトレンチの西側からの状況。覆土外側は地山ブロック混じりの土で埋め戻されている。第１トレンチ周辺は地形的に低く、広く貼床が施される。

ＳＫＩ５竪穴建物跡炭化材検出状況（南→）
第１Ｃトレンチで南東隅を確認し一部を精査したところ､火災に遭った状況を確認。右側の大型材は内部を巡る溝に沿い、板壁を構成したものと思われる。

図版８

ＳＫＩ５竪穴建物跡
部分完掘状況（南→）
炭化材を取り上げた状況。内部を巡る溝の内側に沿って主柱穴を確認した。貼床の上・下と２時期あることも確認。

ＳＫＩ５竪穴建物跡
断面状況（北→）
第１トレンチ東側南壁東端部の断面状況。壁から１ｍ弱内側を巡る溝、貼床上から掘り込まれた主柱穴、竪穴の上から掘り込まれた土坑等の状況。

ＳＤ４溝状遺構完掘（東→）
第２トレンチでＳＤ１・４溝状遺構を検出した。Ⅲ層上面近くから掘り込まれる。立木を間にはさむが同一の遺構と思われる。

図版９

ＳＫＩ５・54 竪穴建物跡
確認状況（西→）
第３Ｃトレンチでｓｋｉ５の北西隅を確認したところ、重複して古いＳＫＩ 54 を検出した。北・東方向に広がりを持つ。

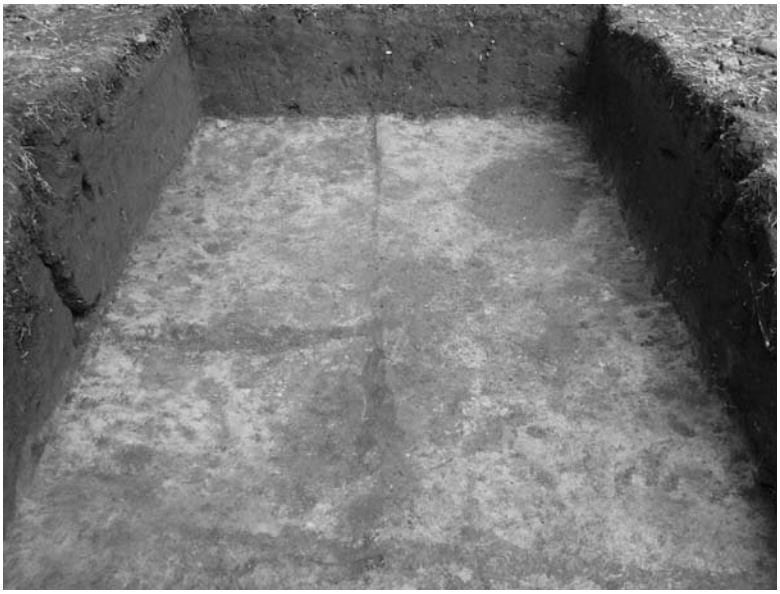
ＳＫＩ５竪穴建物跡
断面状況（西→）
第３Ｃトレンチでも壁から１ｍ弱の位置に溝が巡ることを確認。火災後に内部を片づけ、一気に埋め戻されている。

ＳＫＩ５・54 竪穴建物跡
確認状況（南東→）
第３トレンチのサブトレンチにＳＫＩ 54 に伴うと思われる鍛冶炉を検出した。ＳＫＩ５はⅢ層上面近くで掘り込まれるが、ＳＫＩ 54 はⅢ層下位で掘り込まれている。

図版10

ＳＫＩ 54 竪穴建物跡
鍛冶炉確認状況（南東→）
鍛冶炉は貼床を施して作業面を確保し、凝灰岩質の礫を塼の形状に加工したものも多く使われている。

ＳＫＩ 54 竪穴建物跡
鍛冶炉完掘状況（南東→）
鍛冶炉周辺を完掘した状況。焼土化した床面に鉄滓や焼礫が散乱し、主体部には炭が充填されていた。



第４トレンチ完掘状況（南→）
ＳＤ７空堀の北側は土塁等も構築されず、原地形を保っている。地山面に複数の遺構を検出したほか、西・北壁には漸移（Ⅳ）層が大きく削平された部分が確認でき、竪穴状遺構の存在が想定される。

図版11

ＳＦ６土塁断面状況（北→）
土塁はⅢ層上面を覆うように盛土構築されているが、近世以降の削平を受けている。

ＳＤ７空堀精査状況（北東→）
現況でも確認できる空堀は約1.4ｍ埋没していた。崩落も少なく、自然堆積で埋まっている。

ＳＤ７空堀礫群確認状況（東→）
断面が逆台形を呈する空堀の堀底付近には約50cm幅で礫群が検出された。堀底道と思われる。

図版12

ＳＤ７空堀完掘状況（北東→）
空堀の掘削土を逐次用いて土塁が盛土構築されたため、土塁上部は地山ブロックの盛土層となっている。しかし北側には盛土されていない。

現地見学会の様子
自動車による調査区進入が困難なため、過年度の調査のきっかけとなった、隣接する中学校から20分以上歩き調査区現地へと移動した。

現地見学会の様子
調査区は立木とトレンチにより平場が少ないため、能代市教育委員会の協力のもと、３班に分かれて調査区説明・出土遺物展示・大空堀見学を行った。

第３章　総括

秋田県重要遺跡調査事業は、払田柵跡の学術調査で長年培われた技術的蓄積をもとに、県内に所在する重要な遺跡の保存・活用を図ることを目的に平成21年度から３年間の予定で計画し、初年度及び本年度を当事務所が担当し事業を実施したものである。本年度については史跡檜山安東氏城館跡（檜山城跡・大館跡・茶臼館跡）のうち大館跡を、特に平安時代集落の様相と土塁・空堀の詳細を確認するため、払田柵跡の関連遺跡として対象とし、取り上げた。

第２章第４節に示したとおり、小規模の調査で一定の成果を上げることはできたが、今後の課題として検討が必要となる事項も明らかとなった。

第一は、過年度の調査成果の再検討である。今回の整理作業に伴い過年度の出土遺物を実見する機会を得たが、精査の結果、一定量の擦文土器が出土していたことを確認できた。当時はまだ当該地域の擦文土器にはあまり注意が払われておらず、報告書への記載も見あたらないが、遺跡の主要遺構の性格を左右する可能性もあるため、時間をかけて整理し直すことが必要と思われる。また当時の整理過程において、年度毎に概報として取りまとめた際（調査時？）には遺物への註記も含めアルファベットを用いていた調査区の呼称を、本報告書として概報をまとめる際に、数字を用いる形に改められたため、個別の竪穴建物跡を特定することができなかった。当時の整理資料にあたり、確認を進める必要も不可欠である。

第二は、他地点の調査の必要性である。今回の調査では台地中央を横断する土塁・空堀が、擦文土器が出土する時期からそう下らない時期に構築された可能性を指摘することができた。しかしトレンチによる小規模の調査でもあり、時期を確定させるためには、今後、複数地点で平安時代包含層との前後関係を精査し、確認することが必須と思われる。台地南側を区切る２か所の大空堀についても同様に検討することはもちろん、台地全域における平安時代集落の時間的変遷と消長について詳細に確認するとともに、12世紀以降、檜山城に係る15世紀代までの中世遺構・遺物の有無等について調査を進めることも極めて重要な課題と考えられる。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あきたけんじゅうよういせきちょうさほうこくしょ
書　　名	秋田県重要遺跡調査報告書
副　書　名	檜山安東氏城館跡（大館跡）調査
巻　　次	Ⅱ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 467 集
編 著 者 名	五十嵐一治
編 集 機 関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所　在　地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋 20 番地
発 行 機 関	秋田県教育委員会
所　在　地	〒010-8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号
発行年月日	2011 年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
檜山安東氏城館跡（檜山城跡・大館跡・茶臼館跡）	秋田県能代市檜山、母体、扇田、田床内	202	2-109、103、111	40°11′26″	140°5′57″	20100823～20101105	132 ㎡	学術調査（秋田県重要遺跡調査事業）
	（大館跡）：能代市田床内字大館	202	2-103	北緯・東経は世界測地系による大館跡での数値				

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特　記　事　項
大　館　跡	集落跡	平安時代	土塁、空堀、竪穴建物跡、土坑、溝状遺構	須恵器、土師器、擦文土器、鉄製品、鉄滓	台地中央を横断する土塁・空堀周辺における調査

要　　約	檜山安東氏城館跡（大館跡）の調査は、緊急雇用創出臨時対策基金を活用した「秋田県重要遺跡調査事業」として実施。昭和46～51年度（第１～６次）の調査で、平安時代集落と重複して新しいことが指摘されていた土塁・空堀の詳細を明らかにすることを目的とした。調査の結果、上面に擦文土器を含む平安時代包含層を直接覆うように土塁が構築されていることを確認した。土塁構築土の下部からも擦文土器が出土し、土塁は空堀掘削土を用いて盛土構築されていることから、10世紀後半～11世紀代の擦文土器を含む層を掘り返して土塁・空堀が構築されたと考えられる。

秋田県文化財調査報告書第 467 集

秋田県重要遺跡調査報告書Ⅱ

－檜山安東氏城館跡（大館跡）調査－

印刷・発行　平成 23 年３月

編　　集　秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

〒014－0802　大仙市払田字牛嶋20番地

電　話（0187）69－2442　ＦＡＸ（0187）69－3330

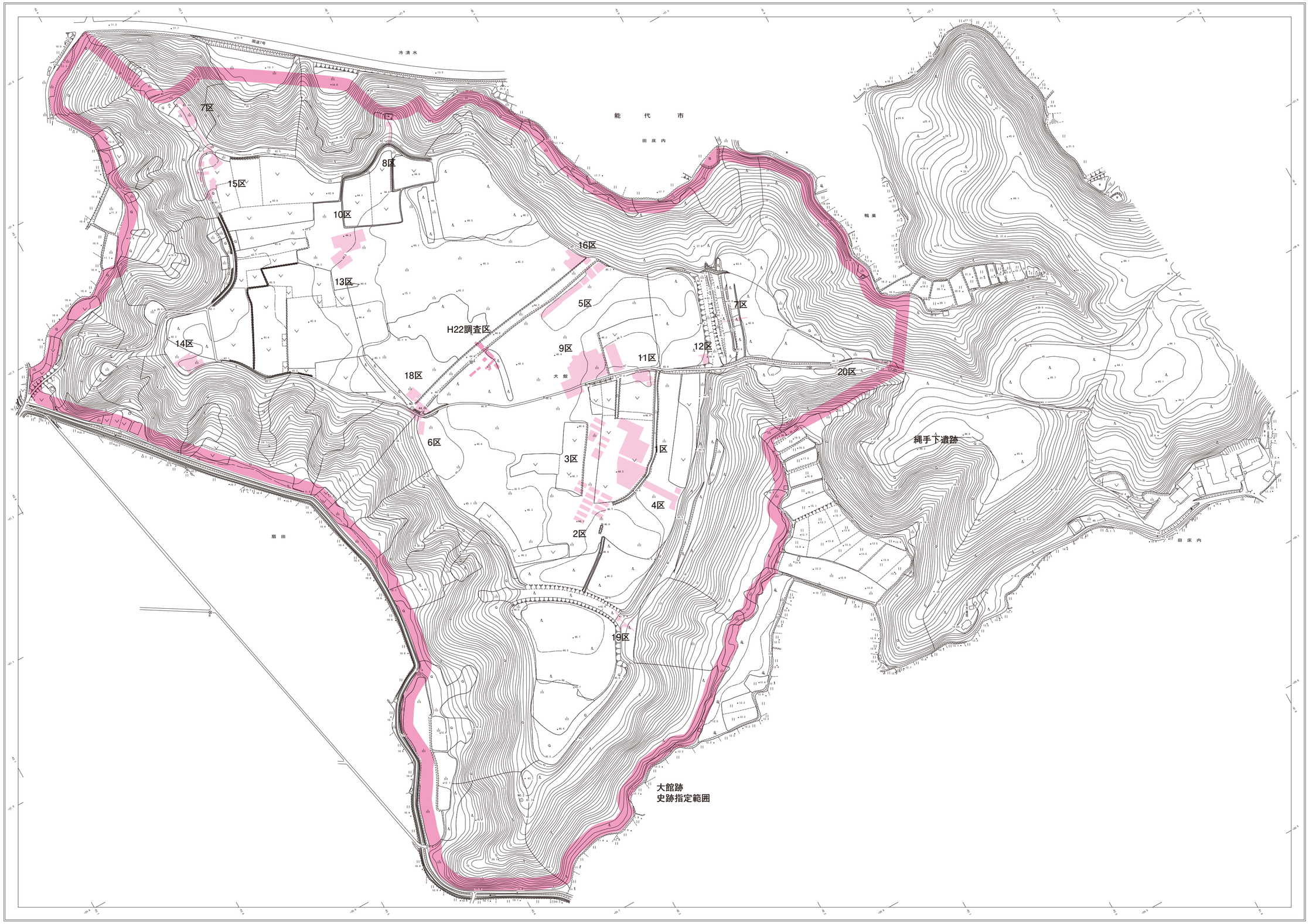
発　　行　秋田県教育委員会

〒010－8580　秋田市山王三丁目１番１号

電　話（018）860－5193

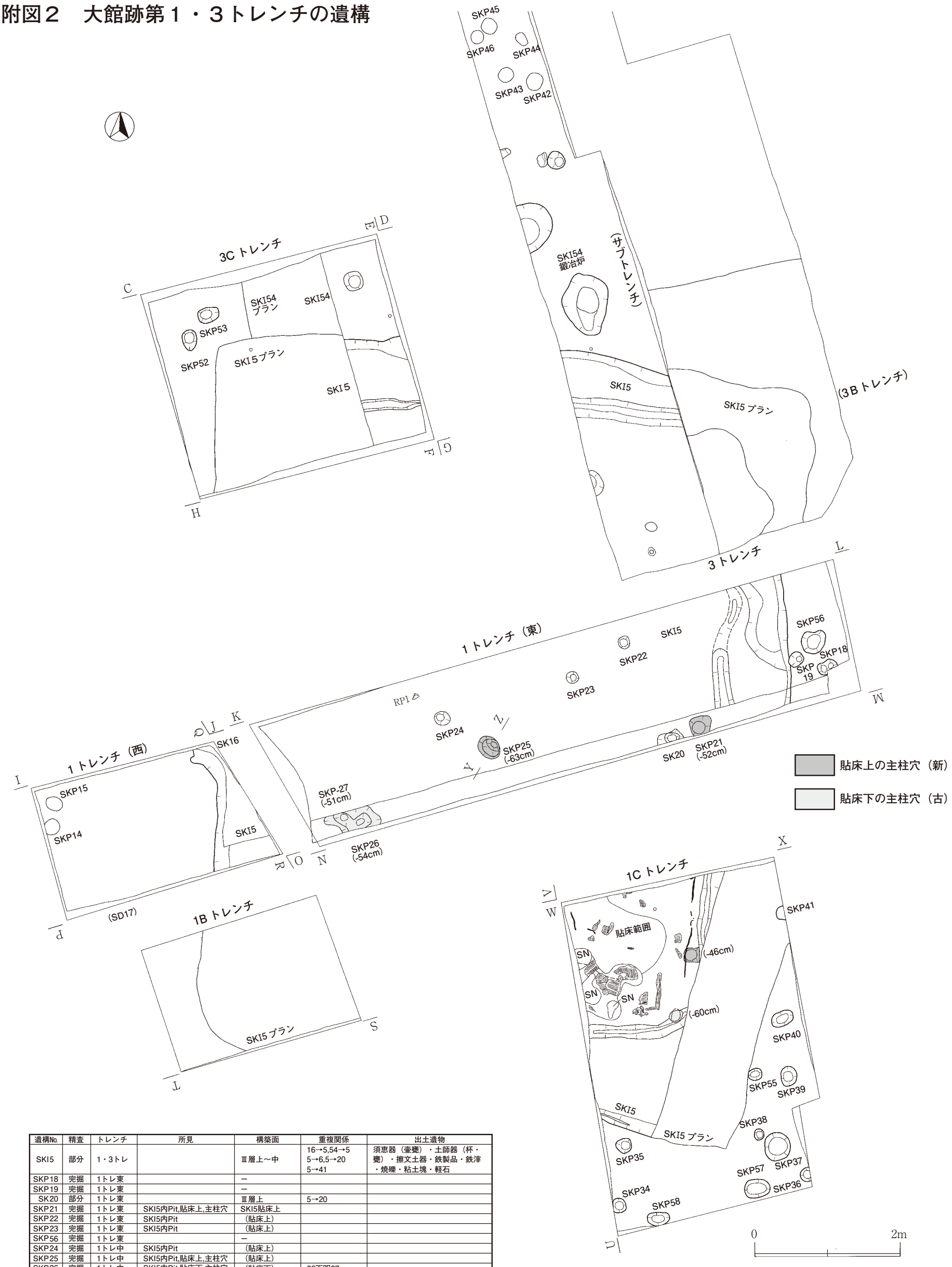
印　　刷　株式会社　松本印刷

附図1　大館跡発掘調査実施位置図



※この附図は能代市発行の国土調査図面をもとに再調整したものである

附図２　大館跡第１・３トレンチの遺構

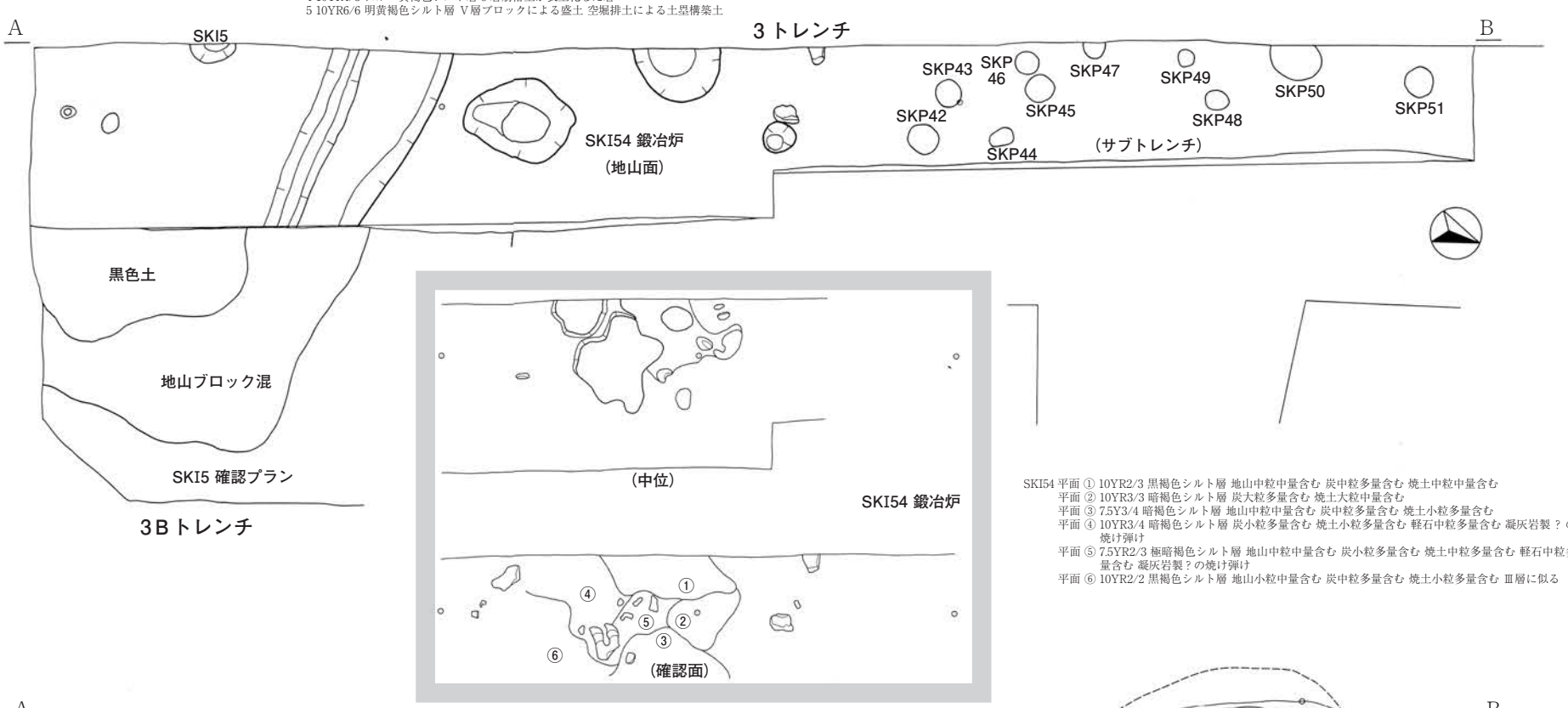


遺構No.	精査	トレンチ	所見	構築面	重複関係	出土遺物
SKI5	部分	1・3トレ		Ⅲ層上～中	16→5,54→5 5→6,5→20 5→41	須恵器（壺甕）・土師器（杯・甕）・擦文土器・鉄製品・鉄滓・焼礫・粘土塊・軽石
SKP18	完掘	1トレ東		―		
SKP19	完掘	1トレ東		―		
SK20	部分	1トレ東		Ⅲ層上	5→20	
SKP21	完掘	1トレ東	SKI5内Pit,貼床上,主柱穴	SKI5貼床上		
SKP22	完掘	1トレ東	SKI5内Pit	（貼床上）		
SKP23	完掘	1トレ東	SKI5内Pit	（貼床上）		
SKP56	完掘	1トレ東		―		
SKP24	完掘	1トレ中	SKI5内Pit	（貼床上）		
SKP25	完掘	1トレ中	SKI5内Pit,貼床上,主柱穴	（貼床上）		
SKP26	完掘	1トレ中	SKI5内Pit,貼床下,主柱穴	（貼床下）	26不明27	
SKP27	完掘	1トレ中	SKI5内Pit,貼床下,主柱穴	（貼床下）	26不明27	
SKP14	確認	1トレ西		Ⅳ層上		
SKP15	確認	1トレ西		―		
SK16	部分	1トレ西		Ⅳ層上～Ⅲ層中	16→5	
SD17	部分	1トレ西	断面で確認	Ⅳ層上～Ⅲ層中		フイゴ羽口
SKP34	部分	1Cトレ		Ⅳ層上		
SKP35	完掘	1Cトレ		―		
SKP36	部分	1Cトレ		Ⅳ層上		
SKP37	完掘	1Cトレ		―		
SKP38	完掘	1Cトレ		―		
SKP39	完掘	1Cトレ		―		
SKP40	完掘	1Cトレ		―		
SKP41	確認	1Cトレ	近現代	Ⅱ層上	5→41	
SKP55	完掘	1Cトレ		―		土師器（杯）
SKP57	完掘	1Cトレ		―		
SKP58	完掘	1Cトレ		―		

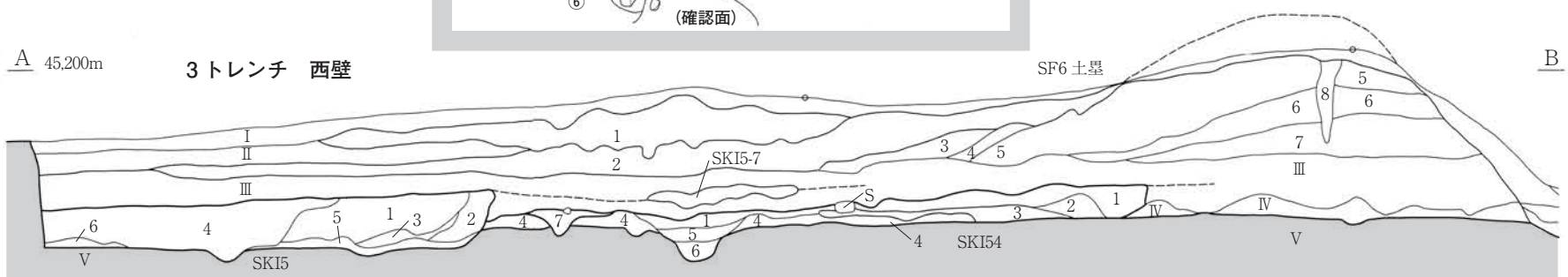
平面焼土 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト層 地山中粒～大粒多量含む 炭中粒多量含む

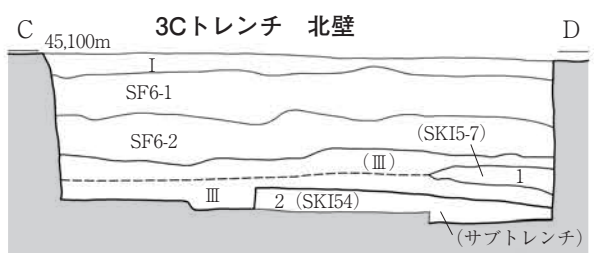
附図３　大館跡第１・３トレンチの土層図

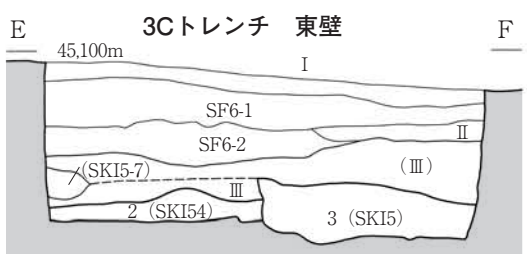
A－B
SKI5 1 10YR3/3 暗褐色シルト層 地山大粒多量含む 炭中粒多量含む 焼土中粒多量含む
2 地山中粒多量含む１層に似る
3 10YR2/2 黒褐色シルト層 地山大粒多量含む 炭中粒多量含む 焼土中粒多量含む
4 10YR3/3 暗褐色シルト層 地山大粒中量含む 炭大粒中量含む 焼土大粒中量含む
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト層 地山大粒多量含む 炭中粒中量含む 焼土中粒中量含む 貼床
6 10YR3/2 黒褐色シルト層 地山大粒少量含む 炭小粒中量含む
7 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト層 地山大粒～小ブロック多量含む 炭中粒少量含む 竪穴掘り上げ土か
SF6 1 10YR4/4 褐色シルト層 地山小粒多量含む 炭小粒多量含む Ⅰ層+5層削土による整地層
2 10YR3/4 暗褐色シルト層 地山中粒中量含む 炭小粒中量含む 焼土中粒中量含む 土塁崩落土が表土化した層
3 10YR5/6 黄褐色シルト層５層崩落土の二次堆積層
4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト層５層崩落土が表土化した層
5 10YR6/6 明黄褐色シルト層 Ⅴ層ブロックによる盛土 空堀排土による土塁構築土
6 10YR4/4 褐色シルト層 地山大粒～小ブロック多量含む 炭大粒中量含む 盛土 空堀排土による土塁構築土
7 10YR3/4 暗褐色シルト層 地山中粒多量含む 炭中粒中量含む 盛土 空堀排土による土塁構築土
8 10YR6/6 明黄褐色シルト層 地山中－大粒多量含む５層の再堆積土 杭跡
SKI54 1 10YR2/1 黒色シルト層 地山小粒中量含む 炭中粒多量含む
2 10YR3/3 暗褐色シルト層 炭小粒少量含む
3 10YR4/4 褐色シルト層 地山中粒多量含む 炭中粒多量含む 貼床
4 10YR2/3 黒褐色シルト層 地山小粒多量含む 炭中粒中量含む 貼床と同じレベルの作業面か
5 10YR4/1 褐灰色火山灰か 炭中粒多量含む 焼土中粒多量含む 炉を覆っている
6 10YR2/1 黒色シルト層 地山小粒多量含む 炭大粒多量含む 焼土中粒中量含む 炭が充填された炉下部
7 10YR3/4 暗褐色シルト層 地山大粒中量含む 炭中粒中量含む 焼土小粒中量含む Ⅲ層からの掘り込み 遺構の一部か

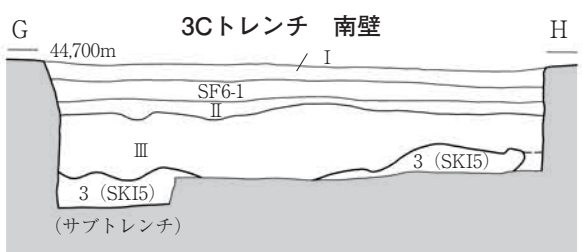


SKI54 平面 ① 10YR2/3 黒褐色シルト層 地山中粒中量含む 炭中粒多量含む 焼土中粒中量含む
平面 ② 10YR3/3 暗褐色シルト層 炭大粒多量含む 焼土大粒中量含む
平面 ③ 7.5Y3/4 暗褐色シルト層 地山中粒中量含む 炭中粒多量含む 焼土小粒多量含む
平面 ④ 10YR3/4 暗褐色シルト層 炭小粒多量含む 焼土小粒多量含む 軽石中粒多量含む 凝灰岩製？の焼け弾け
平面 ⑤ 7.5YR2/3 極暗褐色シルト層 地山中粒中量含む 炭小粒多量含む 焼土中粒多量含む 軽石中粒多量含む 凝灰岩製？の焼け弾け
平面 ⑥ 10YR2/2 黒褐色シルト層 地山小粒中量含む 炭中粒多量含む 焼土小粒多量含む Ⅲ層に似る





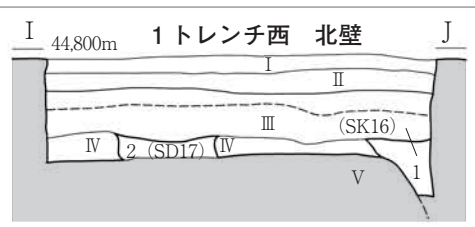


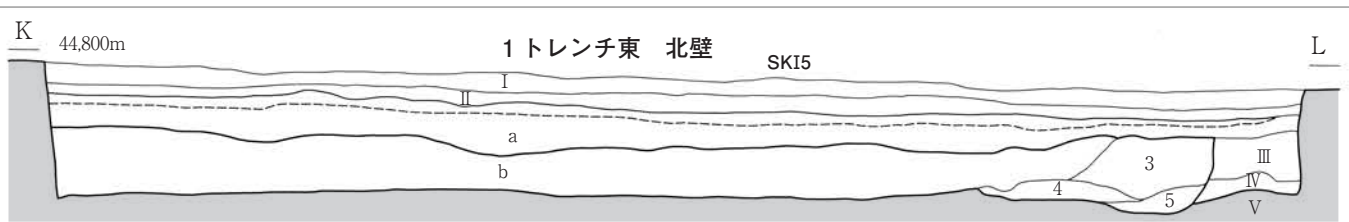


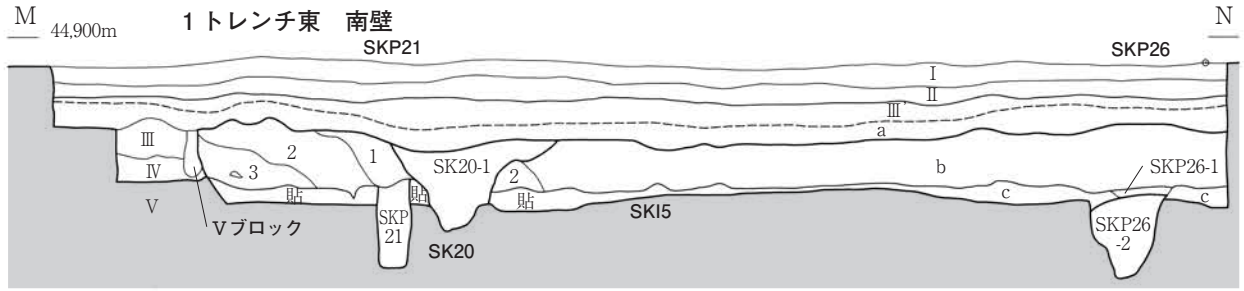
C－D,E－F,G－H
SKI5 1 10YR4/6 褐色シルト層 地山小ブロック多量含む 炭小粒中量含む 焼土中粒中量含む 竪穴掘り上げ土か（SKI5-7 層）

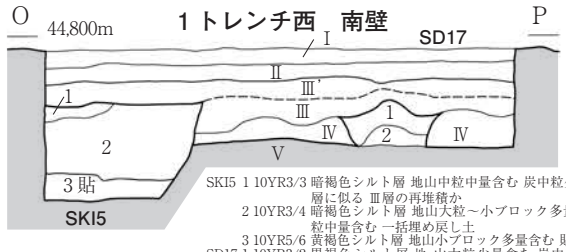
SKI54 2 10YR2/3 黒褐色シルト層 地山大粒～小ブロック多量含む 炭小粒多量含む 焼土大粒中量含む SKI54 覆土

SKI5 3 10YR3/3 暗褐色シルト層 地山大粒多量含む 炭中粒多量含む 焼土大粒中量含む SKI5 覆土

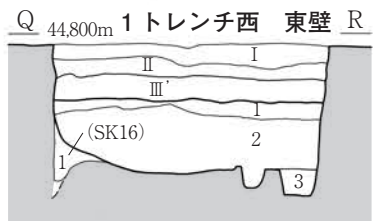




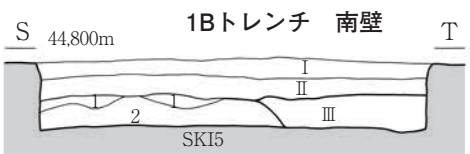




SKI5 1 10YR3/3 暗褐色シルト層 地山中粒中量含む 炭中粒少量含む Ⅲ層に似る Ⅲ層の再堆積か
2 10YR3/4 暗褐色シルト層 地山大粒～小ブロック多量含む 炭大粒中量含む 一括埋め戻し土
3 10YR5/6 黄褐色シルト層 地山小ブロック多量含む 貼床層
SD17 1 10YR3/2 黒褐色シルト層 地-山大粒少量含む 炭中粒中量含む 焼土中粒中量含む Ⅲ層に似る 風倒木等の撹乱か
2 10YR4/4 褐色シルト層 地山大粒多量含む

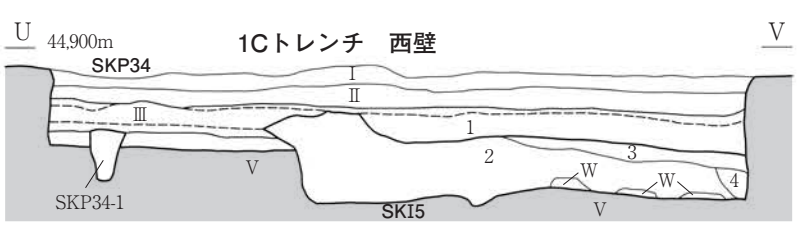


SK16 1 10YR2/2 黒褐色シルト層 地山小粒多量含む 炭小粒多量含む

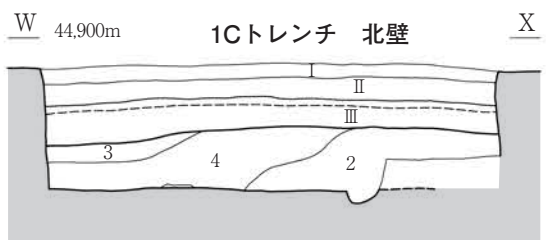


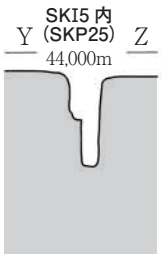
SKI5 1 1 トレンチ東、1 層相当
2 1 トレンチ東、2 層相当

0　2m



SKI5 1　1 トレンチ東、1 層相当
2　10YR3/3 暗褐色シルト層 地山大粒多量含む 炭中粒中量含む 焼土中粒中量含む 1 トレンチ東、2 層相当か 床直部分のみ炭化物大粒多量挟む
3　地山小粒多量含む 1 層に似る
4　地山大粒中量含む 炭中粒中量含む 焼土中粒中量含む 2 層に似る
炭化材 5YR5/6 明黄褐色シルト層 焼土
SKP34 1　10YR2/3 黒褐色シルト層 地山中粒少量含む 炭中粒少量含む





K－L,M－N
SKI5 a　1 トレンチ西 SKI5 の 1 層
b　1 トレンチ西 SKI5 の 2 層
c　1 トレンチ西 SKI5 の 3 層
1　10YR3/3 暗褐色シルト層 地山中粒多量含む 炭中粒中量含む 埋戻しの際に最初に入れられた土 プラン周縁部に入る 凹地となった中央部には主に b 層が入る
2　10YR3/3 暗褐色シルト層 地山大粒多量含む 炭中粒中量含む埋戻しの際に最初に入れられた土 プラン周縁部に入る 凹地となった中央部には主に b 層が入る
3　10YR2/3 黒褐色シルト層 地山大粒中量含む埋戻しの際に最初に入れられた土 プラン周縁部に入る 凹地となった中央部には主に b 層が入る
4　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層 地山大粒多量、ラミナ状に入る 貼床層か
5　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト層 地山大粒～小ブロック多量含む貼床層か
SK20 1　10YR3/3 暗褐色シルト層 地山中粒多量含む 炭中粒中量含む 焼土中粒多量含む Ⅲ層由来か
SKP21 1　10YR3/3 地山小粒多量含む
SKP26 1　10YR3/3 暗褐色シルト層 地山大粒中量含む 貼床層 +2 層
2　10YR3/3 暗褐色シルト層 地山小粒多量含む 貼床下の柱穴 古い段階の主柱穴

遺構No.	精査	トレンチ	所見	構築面	重複関係	出土遺物
SF 6	部分	３トレ		Ⅲ層上に載る	5→6,6=7	縄文土器・剥片、須恵器（甕）・土師器（杯・甕）・擦文土器・フイゴ羽口・焼礫
SKP 42	確認	３サブトレ		－		
SKP 43	確認	３サブトレ		－		
SKP 44	確認	３サブトレ		－		
SKP 45	確認	３サブトレ		－		
SKP 46	確認	３サブトレ		－		
SKP 47	確認	３サブトレ		Ⅳ層上		
SKP 48	確認	３サブトレ		－		
SKP 49	確認	３サブトレ		－		
SKP 50	確認	３サブトレ		Ⅲ層中		
SKP 51	確認	３サブトレ		－		
SKP 52	完堀	３Ｃトレ		－		
SKP 53	完堀	３Ｃトレ		－		
SKI 54	部分	３Ｃトレ	鍛冶炉有	Ⅳ層上	54→5	須恵器（甕）・土師器（杯・甕）・フイゴ羽口・鉄滓・焼礫